

博多 56

——博多遺跡群第84次調査の概要——

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第521集



1997

福岡市教育委員会

博多 56

——博多遺跡群第84次調査の概要——

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第521集



遺跡調査番号 9423
遺跡略号 HKT84

1997

福岡市教育委員会



2区第4面の整地面と礫石



168号造焼の古代人骨



146号造焼出土状況



146号遺構出土 鈎手付片口鏡

序

福岡市博多区の北側、JR博多駅から博多港にかけての都心部は、かつて東アジア、とりわけ中国・朝鮮との貿易で繁栄した、中世都市「博多」の故地にあたります。現在でも中世以来の神社・仏閣が点在し、かつての都市の姿を偲ばせてくれています。また、その地下には、「博多」の遺跡が眠っています。

しかし、残念なことに、現在の都心部にあたるため、種々の開発行為による遺跡破壊は避けられません。福岡市教育委員会では、昭和57年以降、必要に応じて発掘調査を実施して、これに対応してまいりました。本書は、その第84次調査の成果を報告するものです。

第84次調査地点は、帰朝した榮西禅師が最初に建てた禅宗寺院といわれ、鎌倉時代以来博多の中心部を占めてきた聖福寺に近接しています。発掘調査では、奈良時代から近現代にいたるさまざまな造構・造物を検出することができました。特に、16世紀に削られた道路の発見は、これが聖福寺の古文書に見える普賢堂道にあたるとともに、ここが聖福寺の寺内町であったことを示すものとして貴重な成果といえます。

本書が、市民の皆様をはじめ、学術研究の場で活用されることを念願しております。また、調査から整理、報告まで、さまざまな面でご協力いただいた株式会社ユニカをはじめとする多くの方々に、心から感謝を表します。

平成九年三月十五日

福岡市教育委員会

教育長 町田 英俊

例　　言

1. 本章は、共同住宅建設に先立って、福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、博多遺跡群第84次調査（福岡市博多区上呉服町119・133・123番）の概要報告書である。
2. 本章の編集・執筆には、大庭康時があたった。
3. 本章に使用した遺構実測図は、大庭康時・佐藤信（福岡大学）が作成した。また、製図には、折茂由利・大庭康時があたった。
4. 本章の遺構実測図中に用いている方位は、すべて磁北である。また、文中で方位を述べるにあたっても、磁北を基準にしている。
5. 本章に使用した遺物実測図は、森本朝子・井上涼子・上塘貴代子・大庭康時が作成し、森本・井上・上塘が製図した。
6. 本調査で出土した銅鏡は、大庭智子が鏡落とし・判読し、拓本を作成した。そのほかの金属製品は、山田美樹が鏡を落とした。
7. 本章で報告する遺物については、遺構ごとに通し番号をつけて記述した。
8. 本調査にかかる遺構写真・遺物写真是、大庭康時が撮影し、萩尾朱美が焼き付けした。
9. 本書にかかる遺物および記録類の整理には、生垣綾子・今井民代・森寿恵・山田美樹・入江規子・野田真亘・森純子があたった。
10. 本調査にかかるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

遺跡調査番号	9423	遺跡略号	HKT-84
調査地地番	博多区上呉服町119-133-123	分布地図番号	天神49
開発面積	200m ²	調査面積	59m ²
調査期間	1995年6月30日～8月30日		

本文目次

第一章　はじめに	1
1. 調査にいたる経過	1
2. 発掘調査の組織と構成	1
3. 遺跡の立地と歴史的環境	2
第二章　発掘調査の記録	4
1. 発掘調査の方法と経過	4
2. 基本層序	6
3. 造構と造物	8
(1) 第1面	8
道路造構	8
(2) 第2面	10
道路造構	11
012号造構	11
015号造構	13
(3) 第3面	13
028号造構(=042号造構)	15
029号造構	16
031号造構	17
(4) 第4面	18
048号造構	19
(5) 第5面	20
113号造構	22
114号造構	22
115号造構	22
(6) 第6面	24
(7) 第7面	25
141号造構	26
142号造構	27
143号造構	27
146号造構	28
(8) 第8面	36
153号造構	37
167号造構	37
168号造構	40
(9) その他の出土遺物	40
銅錢	42
第三章　まとめ	43
(1) 古代の造構について	43
(2) 146号造構出土の鍋について	44
(3) 中世後半期の景観	44

第一章 はじめに

1. 調査にいたる経過

平成五年5月14日、株式会社ユニカより福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区上呉服町119・133・123番に関する埋蔵文化財事前調査願が提出された。申請地は、中世以来对外貿易で栄えた「博多」＝博多遺跡群の範囲に含まれていた。また、周辺でもこれまでたびたび発掘調査が実施されており、遺跡の存在は容易に推定できた。そこで、埋蔵文化財課では、まず試掘調査が必要と判断し、株式会社ユニカに対しその旨申し入れを行った。

一方、同地に関しては平成三年2月20日ワンルームマンション建設の内容で建築確認申請が提出され、同7月13日には許可がおりていた。これに対し、申請地の前面の半ばをふさぐ宝命湯(錢湯)を中心とする周辺住民からは、高層マンション建設反対の陳願書が福岡市長宛に出されるなど、地元住民の根強い反対が展開された。平成五年5月27日には、宝命湯から将来の発掘調査を含めて試掘調査を実施しないでほしい旨の要望が、埋蔵文化財課に出されている。

こうした状況を受けて、埋蔵文化財課では株式会社ユニカに周辺住民への十分な説明と同意が必要であるとの指導をたびたび行った。

結局、周辺住民の同意が得られないままに平成六年3月30日に株式会社ユニカより工事妨害禁止仮処分の申し立てが行われ、三回の審尋を経て5月17日には仮処分が決定した。その後も周辺住民との最終的な合意は得られないままに山留工事が実施され、ユニカからは調査に着手してほしい旨の要望があった。埋蔵文化財課としては、あくまで周辺住民との合意を前提においたが、仮処分がすでにおりており、工事強行も有り得るという状況のもとで、発掘調査に入らざるを得ないと判断するに至った。

こうして、平成六年6月30日より発掘調査を実施した。なお、試掘調査は実施されていない。

2. 発掘調査の組織と構成

調査委託	株式会社ユニカ	代表取締役	諸方 實作				
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	尾花 剛(前任)				
			町田 英俊(現任)				
調査総括	同	埋蔵文化財課 課長	折尾 学(前任)				
			荒巻 輝勝(現任)				
	同	第二係長	山口 譲治				
調査庶務	同	第一係	吉田麻由美(前任)				
			西田 結香(現任)				
調査担当	同	第二係	大庭 康時				
調査作業	佐藤信(福岡大学) 小野博子 柄本伸一	安部しのぶ 岸本祥子 中山登樹	池田菜穂子 北垣義克 波村和憲 能丸勢津子	石川君子 関加代子 花田克子	江越初代 関義種 藤原孝一郎	大庭智子 曾根崎昭子 村崎祐子	百津等

3. 遺跡の立地と歴史的環境

博多遺跡群は、中世都市「博多」を主として、弥生時代から近世、さらに現代まで続く複合遺跡である。地理的には、玄海灘に面する博多湾岸に形成された砂丘上に位置し、西を博多川(那珂川)、東は江戸時代に開拓された石堂川(御笠川)、南は石堂川開拓以前に那珂川に向かって西流していた旧比恵川(御笠川)によって囲まれる。

この御笠川と那珂川にはさまれた地域は、弥生時代以後の主要な遺跡がならぶ地域でもある。上流側から著名なものをあげると、奴国(ぬしのくに)の中心地であり、奴国王墓も発見された須玖岡本遺跡を中心とする一帯の遺跡群、朝鮮系無文土器が多く出土した諸岡遺跡、日本最古の水田・環濠集落として知られる板付遺跡、弥生時代の青銅器铸造地のひとつである那珂遺跡、弥生時代後期の環溝群や網で巻いた銅劍が発掘より出土した比恵遺跡など、ほぼ直線上にならんでいる。博多遺跡群で調査されている弥生時代中期・後期の集落・墓群は、これら諸遺跡の延長上で理解できるだろう。さらに、そのまま博多湾を渡ると、志賀島の「漢委奴國王」金印出土遺跡にあたる。弥生時代中期に、周辺に可耕地を持たない砂丘上に忽然と出現する博多遺跡群は、奴国の海上活動の拠点集落として位置づけられる。5世紀後半に築かれたとされる博多1号墳(前方後円墳、推定墳丘長60m)も、那珂川右岸に展開する一連の前方後円墳の首長墓の流れの中で考えられよう。6世紀後半には、那の津官家が設置される。その推定位置については、福岡市南区三宅が当てられてきたが、1984年比恵遺跡で横列に埋められた倉庫群が発見されるによよんでこれを官家にあてる説が浮上してきた。同様の、横列に埋められた倉庫群は、早良区有田・小田部遺跡群でも複数検出されており、その性格・実態についてはいまだ定まった評価をあたえられていないが、これらの地域が、有力な地位を保っていたことを示している。

律令時代にはいると、御笠川の最上流に大宰府がおかれて、九州の政治・軍事的中心地となる。博多湾岸には、博多遺跡群とは入り海ひとつを隔てた西の丘陵上に、対外交渉の拠点として鴻臚館がおかれた。博多遺跡群に官衙がおかれた記録はないが、石帶・銅製帶金具・墨書須恵器・須恵器鏡・皇朝鏡・鴻臚館式瓦・老子式瓦などが出土しており、律令官人の存在が推定できる。

平安時代後半になって律令体制が弛緩すると、対外貿易も京都の中央政府の直接的掌握から、大宰府を通じての管理へと変質する。これが、大宰府官人による蓄財のための私貿易の拡大をもたらしたであろうことは、想像に難くない。こうした流れの中で、11世紀には、博多に宋商人の居留が知られるようになる。博多遺跡群が本格的に繁榮・展開するのは11世紀後半になってからで、膨大な量の輸入陶磁器が出土している。さらに、12世紀末から13世紀前半にかけて、聖福寺・承天寺の2大揮刹が博多綱首(博多在住宋商人)の後押しの元で、相次いで建立され、急速に都市化が進行したと見ることができる。

鎌倉時代、2度にわたる元寇で博多付近は戦場になるが、13世紀末には、鎮西探題が博多に設置され、博多は貿易の中心地というのみではなく、九州の政治的中心地という面も持つにいたる。遺構の上では、13世紀末から14世紀初めにかけて、あちこちに道路がつくられており、それらは戦国時代まで続いている。これらの道路は、必ずしも相互に規則性・統一性を持ってはいないが、中世後半を通じての博多の街区、景観はここにつくられたと言えよう。

南北朝時代頃から、博多の海岸部にあたる息浜の勃興・発展が著しく、博多の繁栄の中心は、内陸側の博多浜から、息浜へと移る。息浜商人らは、中国大陆の元・明のみならず、高麗・朝鮮、さらには琉球・東南アジアにまで進出して、貿易を行った。博多遺跡群からは、タイやベトナムの陶磁器が出土しており、これを裏付けている。また、この時代の民間貿易は、海賊である倭寇によって担われ

た一面もあり、博多にも倭寇の存在が記されている。

一方、南北朝時代、足利尊氏によって博多に九州探題がおされたが、九州では攘良親王をいただく南朝方や、反尊氏である足利直冬の勢力が強く、探題の政治力・軍事力は強力なものとはなりえなかった。歌人としても知られる探題今川了俊のもとでは、南朝勢力は圧倒され、了俊は博多にあって朝鮮貿易などに積極的に乗り出す。しかし、了俊のこのような勢威は、將軍足利義満の不興を買い、了俊は探題の任を解かれ、九州を去る。その後、博多は筑前の少弐氏・豊後の太友氏・周防の大内氏による争奪の対象となった。室町時代後半の博多は、堺とならんで自治都市として著名だが、たびたび兵火にかかるて焼亡している。

1586年には中国の毛利氏の軍と対峙した薩摩の島津氏の軍によって焼かれ、灰塵に帰す。翌年、島津氏を逐って九州平定を遂げた徳川秀吉は、博多の復興を指示した。これがいわゆる太閤町割であり、この時点で鎌倉時代以来続いた博多の諸道路、街区は麻痺される。太閱町割は、それまで町のあちこちで異なっていた道路の方向や街区を統一し、博多全体を長方形街区と短冊型地割りで仕切るものであった。こうして、中世都市博多は近世都市に生まれ変わった。

太閤町割と豊臣秀吉の朝鮮出兵によって、博多は再びよみがえる。しかし、江戸時代にはいり、鎖国政策がとられるに及んで、貿易都市としての博多は幕をおろした。そして、黒田氏52万石の城下町福岡と対をなす商人町博多として福岡藩の港都となり、そのまま明治維新を迎えたのである。

本調査地点は、中世都市「博多」の東辺に位置した聖福寺の、かつての寺内町の一角に当たると推測される。

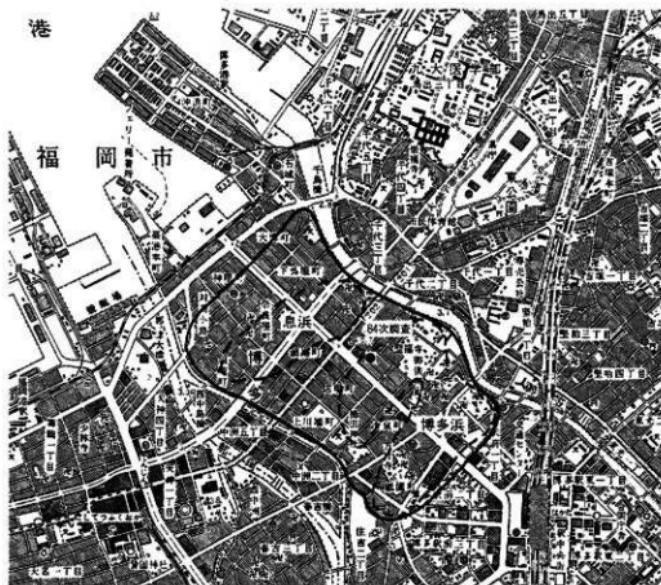


Fig. 1. 博多遺跡群位置図(1/25,000)

第二章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の方法と経過

博多遺跡群は、調査地点によって若干の差異はあるものの、おおむね古代から近世、さらには現代まで続く複合遺跡である。通例、これらの時代を異にする造構は、厚い包含層の中に重層的に残っており、本調査地点においても、同様の状況が予想できた。そこで、当初は重機によって、近・現代の擾乱層を除去した後、トレーナーを設けて土層を検討し、それに応じて造構検出面を設定、人力によつて掘り下げ、造構調査を繰り返して自然地形面まで掘り下げる予定であった。ところが、重機をいれる前日になって、周辺住民から申し入れがあり、住民側の弁護士を交えた上で、振動・騒音を避けるため重機をいれず、現地表から人力で掘削するとの同意がなされた。そのため、調査期間、場内での残土処理、危険防止の観点から調査対象範囲全面の発掘調査は不可能となり、中世の道路の検出が予想できる部分をいれこんで面積を絞り込んだを得なかった。その結果、調査対象面積200平方メートルの内、59平方メートルを発掘調査したに留まる。しかも、隣接地の住民である宝命湯からの要望で、

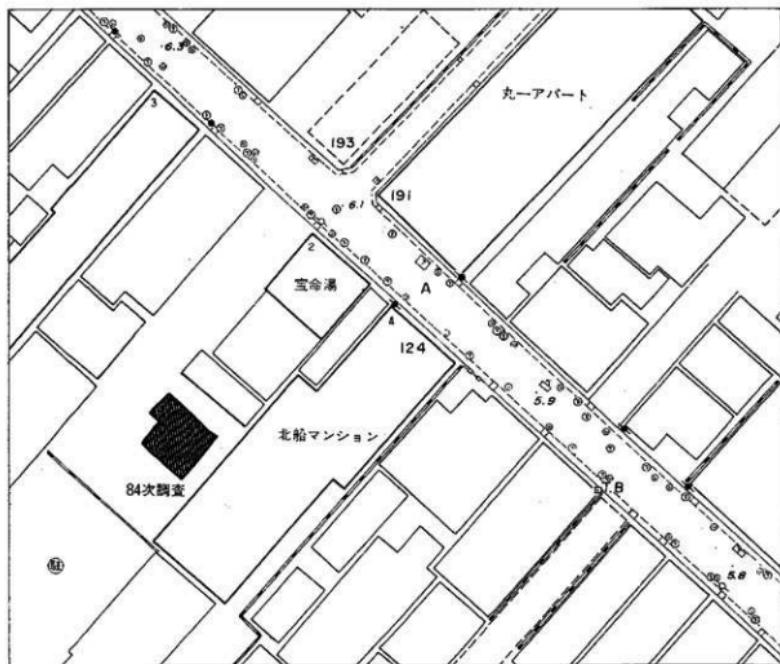


Fig.2. 第84次調査地点位置図(1/500)

調査区壁の倒壊を避けるため壁に斜めの勾配をつけて掘り下げることとなり、発掘調査で設定した遺構検出面の面積は、深くなるに従って狭くならざるを得ず、かなりの未調査部分を残した調査となってしまった。

発掘調査に当たって、残土をためておく関係から、調査区をさらに二分し、打って返しを行うこととした。最初に調査に着手した東側の部分を1区、ついで調査した西側の部分を2区と呼ぶ。

今回の発掘調査では、前述したような経緯から事前の試掘調査が行われなかった。したがって、地山砂丘面の深さや、生活面の堆積の状況などは、あらかじめまったくわからなかった。しかし、申請地の現況が、開口の狭い町屋建物および空き地であったことから、大規模な擾乱層はないものと思われた。要するに、現代から遡る生活面が良好な状態で遺存していることが期待できたのである。掘削に当たっては、この点を考慮して、表層近くといつても、一気に掘り下げるることは避け、何段かに分けて掘り下げた。しかし、後述する第1面までの間には、明瞭な整地面は見あたらず、遺構検出は試みなかった。

1区では、結局第1面から第5面までの調査を実施した。第5面まで実施した段階で、調査区壁の勾配が迫ってきて、遺構検出面に十分な面積が確保できなくなり、以下についてはトレントを設定して、堆積状況の確認につとめた。その結果、さらに数層の生活面の堆積と、トレント最下部から頭蓋骨の出土を見た。頭蓋骨の顔面近くには、上腕骨の一部がのぞいており、さらに2区側に遺体が埋葬されていることが想定された。これによって、打って返しするという当初の計画は不可能となり、人骨が痛まないように仮の埋め戻しと養生を行い、2区の残土は申請地内の空地にさらに積み上げることとした。

2区の遺構検出面の設定に当たっては、1区の成果を参考として、1区で調査できなかった第5面以下の調査にも注眼をおいて調査を行った。その一方で、1区において検出成果がかんばしくなかつた遺構検出面については、調査期間との兼ね合いから、2区での検出面設定を行わなかった。また、2区の下位の3面は、1区ではトレントで確認したにとどまった部分である。1区から出土した埋葬遺体は、2区の最下遺構面において、土坑掘り方を確認し、それまで仮に埋め戻していた頭部と併せて精査を行った。埋葬人骨の検出・取り上げに際しては、九州大学の中橋孝博先生のお手を煩わせた。中橋先生からは、本書に出土人骨に関する所見をご執筆いただいている。

遺構は、1区から検出順に番号をつけ、遺構の種別に問わらず第〇号遺構として登録し、遺物を取り上げた。したがって、1区の最下層である第5面の遺構番号よりも、2区の最上層である第2面の遺構番号の方が大きい数字が付くなどの逆転現象が起きている。

遺構実測は、20分の1で平面図を作成した。平面実測図の基準点は、調査の進行を妨げないように各遺構検出面ごとに任意に設定し、安全対策上隣接地との間にもうけた犬走り状の空地部に打ち込んだ二本の杭から、角度を計測することでその位置を仮座標上に読み込んだ。遺物の出土状況から個別の平面図・断面図が必要と判断された遺構については、10分の1で実測した。土層実測図は、調査区の東壁で20分の1で作成した。

写真は、35ミリ版・6×7版のカメラを用い、それぞれモノクロとカラースライドフィルムで撮影した。遺物写真は、基本的に6×7版で撮影している。

発掘調査は、こうしてさまざまな経緯を引きずりながら、平成六年8月30日、埋葬人骨の取り上げをもって終了した。なお、株式会社ユニカから直ちに着工する旨の中し入れを受けたため、調査部分の埋め戻しは行わなかった。

2. 基本層序

前述したように、本調査地点では基本的には擾乱は少なく、各時代の生活面がよく保存されているものと考えられた。以下、土層実測図を作成した調査区1区東壁を例に取って、基本的な堆積状況について説明する。

標高6.8メートルをはかる最上部の表土をはがすと、二層に分かれた整地層がみられる。遺物の混入が少なく、時期を判断しかねたが、おそらくは現代の整地であろう。それ以下、第1面を設定した標高5.65メートル付近までは、暗褐色を基調とした縮まりのない土が続き、整地層はみられない。この間に近世・近代の堆積が入るはずであるが、生活面を区別することはできなかった。

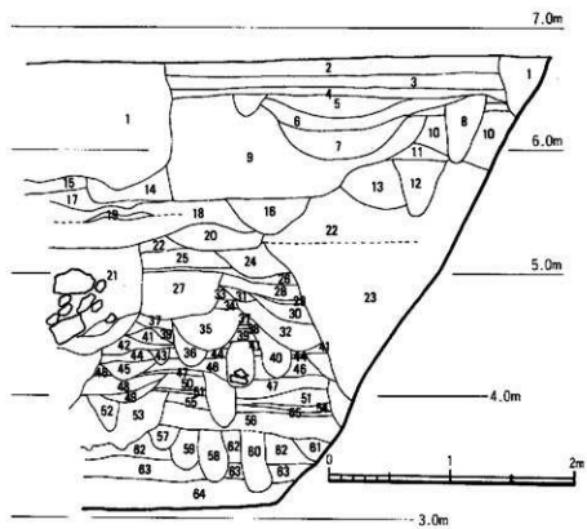
標高5.6メートル付近から標高3.8メートルあたりまでは、比較的細かい堆積が、ほぼ水平方向にみられる。この部分には、粘土を用いた整地面も数枚入り、明らかな生活面が確認できる。これが、おむね中世の堆積層に当たる。

標高3.8メートルから3.3メートルの間は、砂質土または砂が堆積する。古代の包含層及び造構埋土である。



Ph.1 土層堆積状況(1区東壁)

標高3.3メートルから以下は、自然堆積の砂丘砂層である。博多遺跡群の基盤層であり、これ以下で造構を検出した例はこれまでのところ知られていない。



- | | | |
|------------------------|-------------------------|---------------------------|
| 1. カクラン | 25. 淡褐色土、しまる | 45. 暗褐色土、燒土まじり |
| 2. 灰色上黑色土 | 26. 黄灰色粘土(第4面盤地剖) | 46. 灰色砂質土、茶色粘土・黄色粒土・斑点まじり |
| 3・4 整地層 | 27. 淡褐色土 | 47. 燃土 |
| 5. 菩地土の落ち込み | 28. 淡褐色土 | 48. 黑褐色土、炭粒まじり |
| 6. 粘土 | 29. 黑褐色土、炭・灰まじり | 49. 暗褐色土、若干砂質 |
| 7・8 木炭灰土 | 30. 黑褐色土 | 50. 黑茶色土 |
| 9. カクラン | 31. 黄灰色砂質土 | 51. 焼土 |
| 10. 暗褐色土 | 32. 黑灰褐色土 | 52. 淡褐色土 |
| 11. 灰褐色土 | 33. 淡褐色土 | 53. 黑灰色土、下部は鉄分沈着し黄褐色 |
| 12. 黑褐色土 | 34. 灰色土、焼土まじり、しまりあり | 54. 黑灰色土 |
| 13・14 灰褐色土 | 35. 淡灰褐色土、しまりなくゆるい | 55. 暗褐色砂質土 |
| 15. 淡褐色土、かたくしまる | 36. 淡灰褐色土、しまりなし | 56. 淡褐色砂質土 |
| 16. 淡褐色土 | 37. 淡褐色土 | 57. 淡灰色土 |
| 17. 灰褐色土、かたくしまる(第1面) | 38. 黄色化面、鉄分沈着(第5面) | 58. 黑灰色土 |
| 18. 墓葬場地土、砂粒を多く含む(第2面) | 39. 灰土層、下部は基化した焦土层(第6面) | 59. 淡灰褐色土、湿度を帯びた |
| 19. 灰・灰 | 40. 淡褐色土 | 60. 淡灰褐色土、若干砂質 |
| 20. 燃土 | 41. 淡褐色土、燒土・炭まじり | 61. 淡灰褐色土、60に似る |
| 21. 灰褐色土、しまりなし | 42. 黑灰色砂質土 | 62. 淡茶褐色砂 |
| 22. 灰褐色土、かなくしまる(第3面) | 43. 淡褐色砂質土 | 63. 茶褐色砂 |
| 23. 暗褐色土、22との境界は不明 | 44. 淡灰褐色砂質土 | 64. 淡黃色砂(地山)(第8面) |
| 24. 暗褐色砂質土 | | |

Fig. 3. 調査区東壁土層実測図(1/40)

3. 遺構と遺物

次に、各遺構検出面と主要な遺構の概要について述べる。なお、前述したように1区と2区では、遺構検出面の設定に若干の違いがある。本書の記述に当たっては、初めに面の設定をした1区に準じて述べ、1区で調査ができなかった下層については2区の設定を1区の設定面の後に続ける形で記す。したがって、1区と2区の調査地の遺構検出面の対応は、次の通りとなる。

第1面 = 1区第1面、第2面 = 1区第2面・2区第1面、第3面 = 1区第3面、第4面 = 1区第4面・2区第3面、第5面 = 1区第5面・2区第4面、第6面 = 2区第5・6面、第7面 = 2区第7面、第8面 = 2区第8面

なお、2区第2面はべとべとの土壌で遺構検出ができず、調査を割愛した。2区第6面は、第4面のすぐ下で確認した火災面を追つたものだが、この面に伴う遺構は抽出できなかった。

(1) 第1面

標高5.65メートル付近で、道路遺構の整地と思われる砂の部分を検出し、これを鍵層として第1面を設定した。

1区の北寄りと中央付近に大きな擾乱があり、遺構の検出状況は良くなかった。全部で11基の遺構を検出したが、もっとも遡る遺構で16世紀末、ほとんどが近世のものであった。

2区においては、時間の制約から第1面を設定していない。

道路遺構

1区の中央やや北寄りで検出した路面である。調査区を南西から北東に通る。北側の路肩はおおむね確認できだが、南側については擾乱坑に切られており、検出できなかった。

路面は、灰白色砂で、若干しつつとした粘り気を持つ。若干硬化した面はみられるが、極端に堅く縮まった面は認められなかった。周囲の遺構の年代観を考慮すれば、1587年の太閤町割で廃止される直前の道路と考えて良かろう。

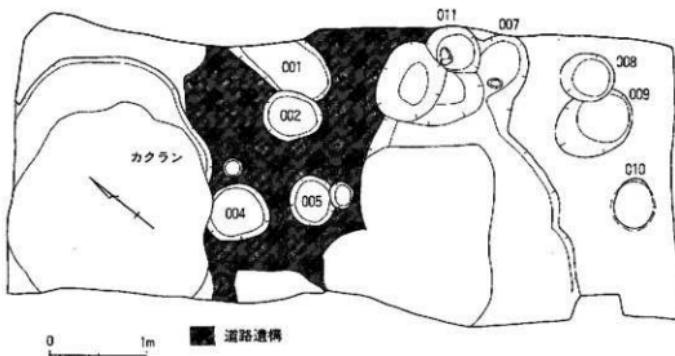


Fig. 4. 第1面遺構平面図(1/50)



Ph.2 第1面全景(南東から)



Ph.3 第1面道路造構(南西から)

(2) 第2面

標高5.55~5.6メートルで設定した造構検出面である。2区の第1面に当たる。

1区の第1面を終了した段階で道路造構にトレンチをいれ、道路整地の厚さを調べた。その結果、道路の砂質土の厚さは、10センチ内外と薄く、道路最下部をめざして掘り下げを行った。道路最下部にいたり、玉砂利を交えた硬化面を検出、これを鍵層として、第2面を設定した。したがって、第2面は、ここに最初に道路がつくられた当時の生面と考えられる。

第2面では、道路の南側に、整地面が確認できた。この整地面は、路面が玉砂利混じりの砂質土であるのに対し、灰白色の粘土であり、路面とは明らかに異なる。道路に面した家屋の上間などの作業空間であろう。

第2面では、土坑・柱穴・溝状造構などを検出した。012~014・015・017・022・069・070号造構などは近世の造構である。015・016号造構は、出土遺物からは、16世紀代が当てられる。両造構の場所は、第1面では道路造構の整地砂におおわれていた部分で、第2面道路から第1面道路へ嵩上げを行なながら繼續していく時間的経過の中で、柱穴もしくは土坑が掘り込まれるような状況もあったことを示している。同様の例はこれまでの調査でも確認されており、これをもって、一時的にせよ道路が中絶したと考える必要はない。

第2面の年代観としては、これらの造構と次に述べる道路造構の年代観から、16世紀代を当てるこ

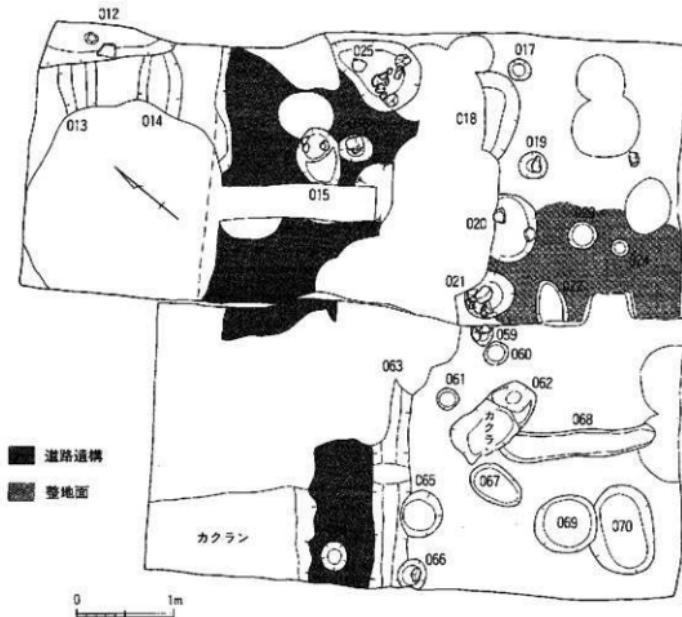


Fig. 5. 第2面造構平面図(1/50)

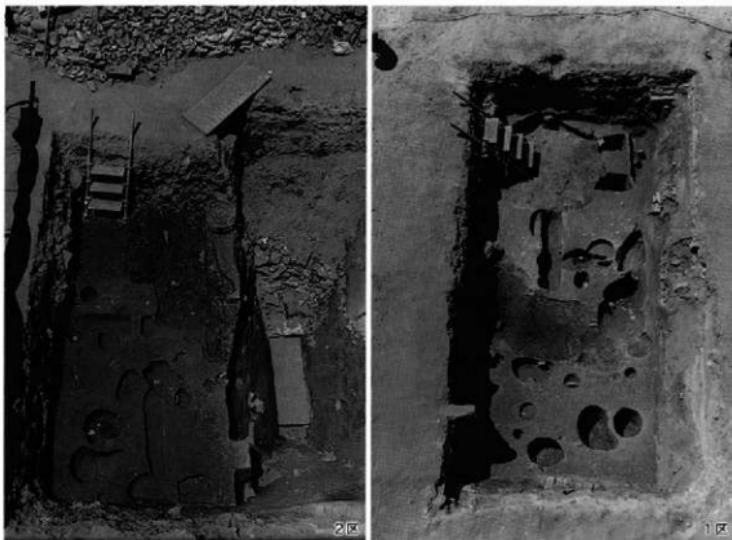


Fig.4 第2面全景(南東から)

とができるよう。

道路遺構

玉砂利混じりの砂質土で整地された道路面である。路面は、非常に堅く締まっていた。

北側と南側の路肩を確認することができた。それによると、道路幅は、約2メートル程度で、幅一間強の狭い道路である。また、両側には路面の整地土の切れ目に沿って、溝(063号遺構)が走っている。路面を切っている可能性もあるが、一応道路とともに掘られた側溝と考えた。

第1面道路遺構からの整地層の掘り下げによって、明青磁香炉・白磁壺反り皿・青花基筒底皿などが出土しており、おおむね16世紀代の遺物と見られる。このことから、この地点に最初に通された第2面道路遺構の年代も16世紀代で、15世紀までは通らないものと考える。

012号遺構

1区の北東隅で検出した土坑である。一部分が調査区にかかったのみで、全体は知りえない。

Fig.6に出土遺物を示した。1~4は、土器の皿である。すべて底部は回転糸切りする。内底部の擦で調整はみられない。1が比較的肉厚なほかは、法量的・形態的に類似している。口径9.4~9.6センチ、器高1.3~1.55センチをはかる。

5~8は、輸入磁器である。5は、白磁の皿の小片である。6は、染付の皿であろう。基筒底になるタイプのものかも知らない。7・8は青磁である。7は、鍋蓋弁文の碗である。薄手なつくりで、口縁は大きく外反する。8は、皿であろう。見込みの釉をはぎ取っている。

9は、瓦質土器の火合である。内面は全面を横方向の刷毛目調整、外面は丁寧に荒磨きする。



Ph.5 第2面道路造構(南西から)



Ph.6 第2面道路造構硬化面(南東から)

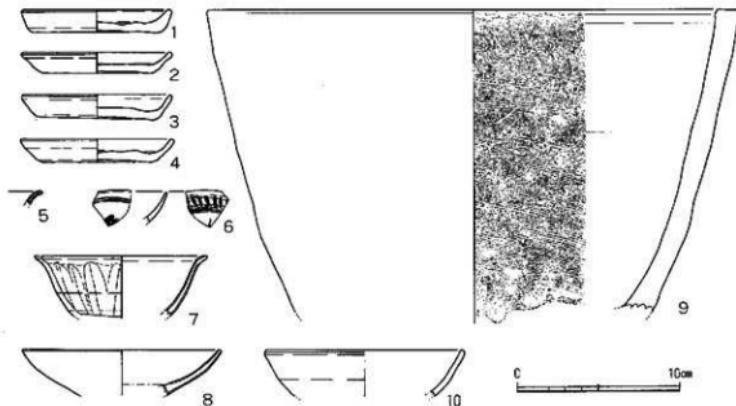


Fig. 6. 012号造構出土遺物実測図(1/3)

10は、唐津焼きの皿である。暗赤褐色の胎に、灰釉を施す。

このほか、若干の肥前陶磁器が混じっており、時期的には、17世紀前半以降に下るものと見るのが妥当であろう。

015号造構

道路面に切り込んで掘られていた土坑のひとつである。長軸65センチ、短軸50センチ程度の卵型を呈する。床面は二段掘り状となるが、意図的に掘り分けられたものではない。深さは、もっとも深い部分で30センチ程度をはかる。

Fig.7に出土遺物を示す。

1は、土師器の壺である。底部は、回転糸切りである。口径に対して底径が小さく、体部は外反気味に大きく開く。口径11.0センチ、底径4.7~4.9センチ、器高2.5センチをはかる。

2は、中国産の褐釉陶器である。壺の底部であろう。茶褐色の釉を施している。

このほか、土師器の皿、瓦質土器破片などが出土している。土師器の壺・皿などから、16世紀の造構と考えられる。

(3) 第3面

標高5.25メートル前後で設定した造構検出面である。灰白色の粘土による整地面である。2区では第2面がこれに当たるが、1区第3面での整地面の粘土を部分的に点的に検出したが、全体的にはべ

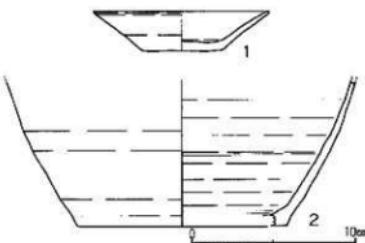


Fig. 7. 015号造構出土遺物実測図(1/3)

とべとで締まりのない土壌で、造構検出を試みはしたが、満足に造構のプランも確認できない有り様であった。したがって、2区では、この面の調査を断念した。

検出した造構は、柱穴・土坑である。この面では道路造構ではなく、ほぼ全面に整地面が広がっていた。026号造構は、16世紀の円形土坑である。大型の廐棄土坑であろう。土師器・陶磁器に混じって、管状土錘・土鉢などが出土している。028号造構は、石積みを伴った大型の土坑である。15世紀代と考えている。029号造構は、028号造構に連続した集石造構である。一連の造構であろうか。031号造構

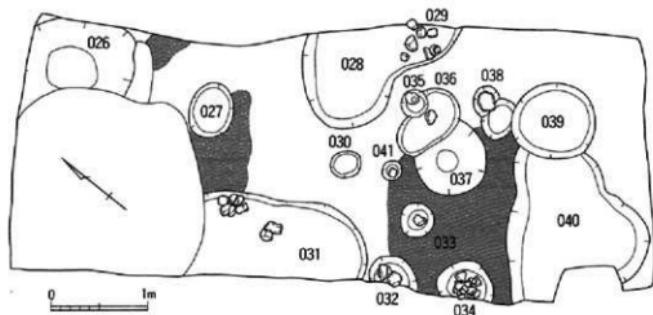


Fig. 8. 第3面造構平面図(1/50)



Ph.7 第3面全景(南東から)

は、不整形の大型土坑だが、実測図中みられる二箇所の集石は、032号造構・034号造構同様の柱穴の根詰め石であろう。035号造構は柱穴であるが、埋土中から鉄滓が出土している。鍛冶津である。

第3面の時期は、おおむね15世紀頃と思われる。

028号造構(=042号造構)

1区東壁の中央付近で検出した、大型の石積み土坑である。第3面調査時には石壁付近のみを028号造構として調査したが、第4面の調査時にこれと連続する集石が確認でき、(042号造構)一連の大型造構と判断したものである。

石積みは、土坑の南壁のみにしか見られず、本来全体を囲ったものではないようである。

Fig.9に出土遺物の一部を示す。1は、土師器の壺である。体部のみの破片であるが、口径に対して底径が小さいタイプになると思う。

2は、朝鮮王朝の陶器の碗である。灰青色の不透明の釉がかかる。

3は、備前焼の指鉢である。

4・5は、瓦質土器の指鉢である。内底部は、使い込まれて摩耗している。

6は、青白磁の香炉である。

7は、石臼である。

このほか鉄釘が出土した。



Ph.8 028号造構(北西から)



Ph.9 042号造構(1)北西から(2)南西から

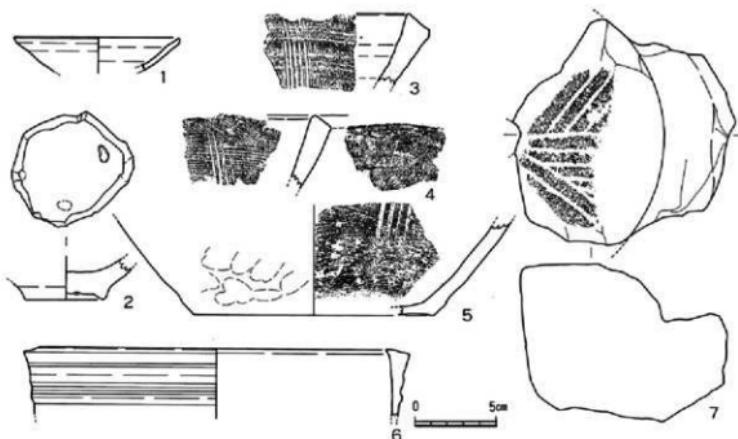


Fig. 9. 028号造構出土遺物実測図(1/3)

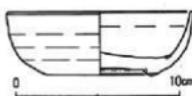
これらの出土遺物からみて、15世紀代に位置づけられよう。

028号造構

028号造構の南に接する集石造構で、集石に切れ目がなく一連の造構

の可能性がある。ただし、機能的にどう関連したかは、判然としない。Fig.10.

Fig.10に、集石中から出土した青磁の基筋底皿を図示した。全面に施



029号造構出土遺物実測図
(1/3)



Ph.10 029号造構遺物出土状況(南京から)

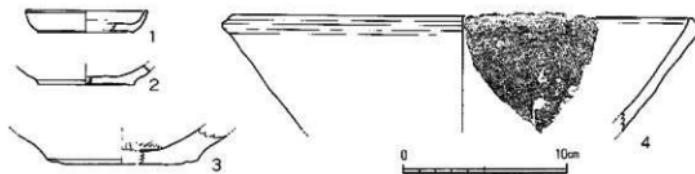


Fig. 11. 031号造構出土遺物実測図(1/3)

軸した後、基盤底状に削り込む。結果、この削り込んだ部分のみ露胎となる。

このほか、土師器皿、土鍋、瓦俾などが出土しており、15世紀代に位置づけられる。

031号造構

1区の西側で検出した、大型の不整形土坑である。廃棄土坑であろう。

出土遺物の一部を、Fig.11に示す。1・2は、土師器である。1は、皿で、底部を回転条切りする。口径7.7センチ、器高1.35センチをはかる。2は、壺である。底部は回転条切りで、内底部に撫で調整を加える。造存部分から見て、体部が大きく開き、口径が底径に対して大きいタイプであろう。

3・4は、瓦俾土器の擂鉢である。内底は、使い込まれて摩滅している。

これらの遺物から、15世紀代の造構と見るのが妥当であろう。

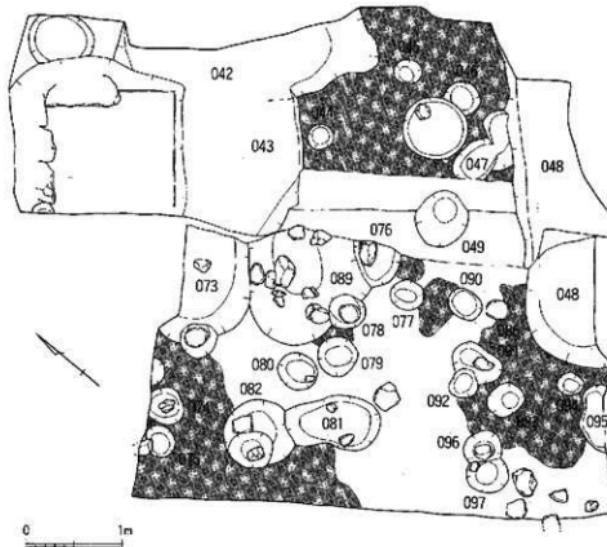


Fig. 12. 第4面造構平面図(1/50)

(4) 第4面

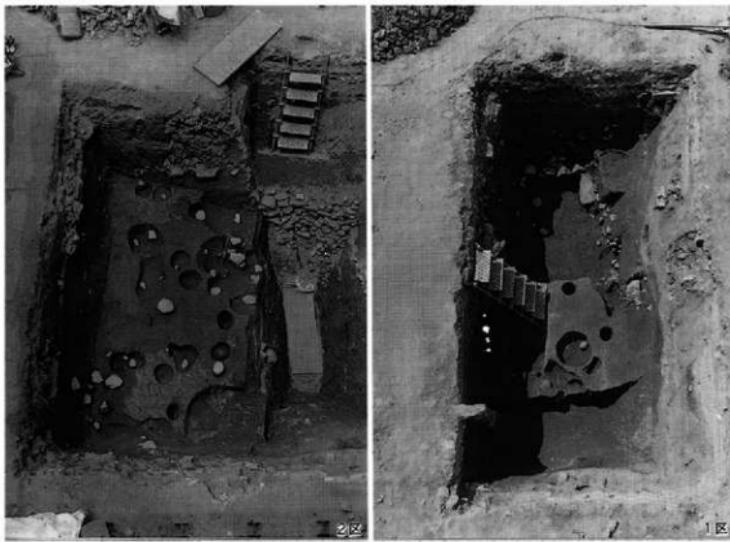
標高5.00メートルで設定した造構検出面である。第3面終了後、トレンチを設定し、下層の状況を観察したところ、第3面整地層から暗灰色土層をはさんで焼土混じりの黄灰色粘土による整地層を確認、これを第4面とした。2区では、第3面がこれに当たる。

第4面では、柱穴・土坑・溝状造構を検出した。柱穴では、礎板の石を沈めたものが目だつ。また、本来は掘り込みを作ったのかも知れないが、面上にやや浮いた形で検出された礎石も見られる。これらは、比較的大きな偏平な石を用いたもので、第3面以上の検出面では見られなかった造構である。第4面をおおう整地層の考え方併せて、ここに比較的規模の大きい建築物を想定できよう。

1区北隅の一角を占めていた搅乱坑は、大型の石を方形に配した、方形石組土坑と判明した。すでに石が抜かれた部分もあり、石の背面には、板を立てていた状態が看取できる。

042号造構は、前節で述べた028号造構の一部である。043号造構は、2区の073号造構につながる。大型の土坑である。蓋付きを露胎とする箇庵弁文の青磁碗や口禿の白磁皿などが出土しており、14世紀前半に比定するのが妥当であろう。048号造構は、調査区南壁から検出した造構で、第2面の下から掘り込まれたものである。16世紀代。このほか049号造構・077号造構・091号造構・098号造構などが、14世紀前半頃に属していると思われる。

これらの造構から、第4面はおおむね14世紀と考えられる。特に整地面としては、14世紀前半に絞り込んでも支障ないものと考える。



Ph.11 第4面全景(南京から)

048号遺構

1区と2区にまたがって、調査区の北壁沿いに検出した溝状の土坑である。一部を検出しただけなので、全体の形状はわからない。深さは、45センチをはかる。第4面より上から掘り込まれていることは明らかで、壁面の観察では、第2面の直下付近から確認できる。第3面において検出しそこなかったものであろう。よって、その分を加えれば、本來の深さは100センチ程度にはなろう。機能・性格は不明である。埋土は茶褐色土で、少なくとも水が流れたり、水を湛えたりした形跡はない。

出土遺物を、Fig.13に示す。1～6は、土師器である。1～4は皿で、底部を回転糸切りする。体部の立ち上がりが深いものと浅いものの二種がある。5・6は、壺である。底部は回転糸切りである。皿と同様に深いものと浅いものの二種がみられる。7は、瓦器の碗である。下層からの混入である。8は、瓦質土器の火舍である。表面は刻離気味であるが、口縁外側には菊花の印花文、内面には横位の刷毛目調整痕が残る。

9・10は、青白磁の合子である。11～13は、白磁である。11は玉縁の碗の口縁部である。12は、皿であろう。口縁端部をくぼませて、輪花につくる。13は、碗であろう。口縁部の釉を拭き取って、いわゆる口禿につくる。14～18は、青磁である。14は、小鉢の口縁部である。15は、稲作皿であろう。口

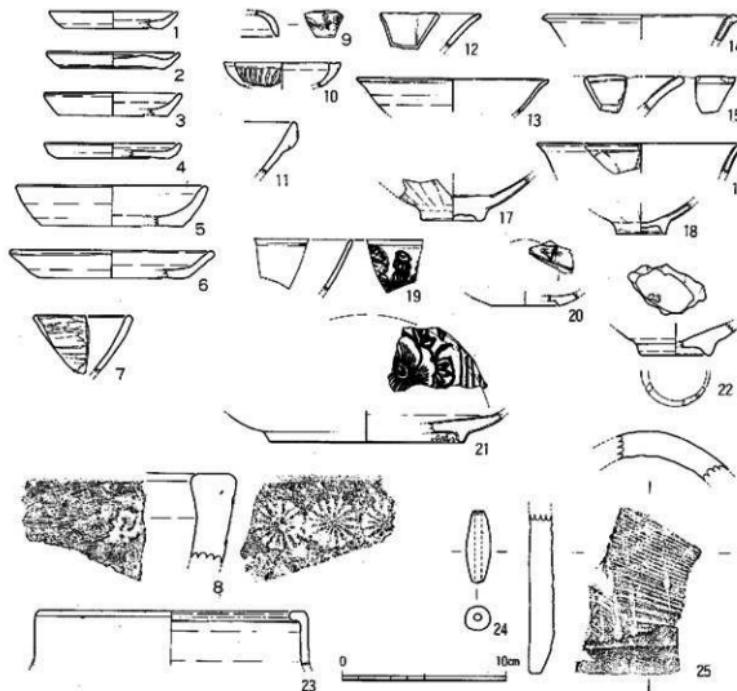


Fig.13. 048号遺構出土遺物実測図(1/3)

縁内面に沈線を刻む。16は、碗の口縁部である。蓮弁文の一部がうかがえる。17・18は、碗の底部である。17には、鍋蓮弁文が残る。18は、全面に施釉した後、高台の疊付きを削って露胎とする。19～21は、染付である。19は、碗の口縁である。20は、基筒底の皿である。胎上は肌理があらく、陶質である。21は、皿である。高台脛付きには、砂が付着している。22は、朝鮮王朝の白磁碗である。全面に施釉し、見込みと疊付きに砂目が残る。

23は、磨津焼きの盃であろう。口縁端部から外面に、やや青みを帯びた淡灰色の釉を薄く施す。近世以降の遺物はこの一点のみであり、混入品であろう。

24は、管状土錐である。十師質に焼かれる。

25は、丸瓦である。粘土板からコピキで切り離した後、湾曲を付ける。端部は、工具で削る。

これらの遺物からみて、15世紀末から16世紀初め頃の時期を考えたい。

(5) 第5面

標高4.52～4.55メートルで設定した造構検出面である。トレンチによる第4面以下の観察で、第4面の下に黄灰色粘土による薄く断続的な整地層を確認したが、面として広がりが終える状況ではなかったため、この層での造構検出は断念した。そして、さらに下位で、焼土面と鉄分が沈着して硬化した面を検出、これを第5面とした。硬化面は、調査区ほぼ全面に広がっている。

第5面では、柱穴・土坑などを検出した。柱穴は、調査区の南半分に片寄る傾向がみられる。時期を明確に示す遺物が出土した遺構が少ないが、057号造構・103号造構・113号造構・115号造構などから鍋蓮弁文の青磁や口禿の白磁が出土しており、13世紀後半代の時期が想定できよう。

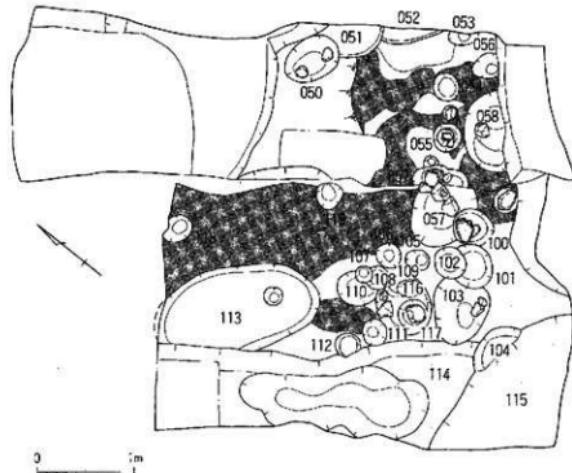


Fig. 14. 第5面造構平面図(1/50)



Ph.12 第5面全景(南東から)



Ph.13 I区第5面、整地面検出状況(南東から)

113号遺構

2区の北よりで検出した土坑である。長軸175センチ、短軸95センチの楕円形を呈し、深さは約15センチをはかる。廐土坑であろう。

出土遺物の一部を、Fig.15に示す。1・2は、土

師器の壺である。1の底部は、回転糸切りされ
る。1で口径11.6センチ、器高2.3センチ、2で口径12.4センチをはかる。

3は、無軸陶器の捏鉢である。かたく焼き締められて、暗赤褐色を呈する。

このほか、銷蓮弁文の青磁碗、瓦質土器の鉢、鉄製釣り針などが出土している。おおむね、13世紀代を示すものといえよう。

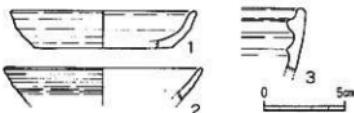


Fig. 15. 113号遺構出土遺物実測図(1/3)

114号遺構

2区西壁沿いに検出した溝状の土坑である。全形は知りえない。底の一部がさらに上坑状にくぼむ。
検出面からの深さは、溝底で15センチ前後、土坑状部分で40センチ前後をはかる。機能は不明。

Fig.16に出土遺物を図示する。1~9までは、土師器である。すべて底部は、回転糸切りである。1~7
は皿で、1・3・4・6のや立ち上がりの深い皿と、2・5のように浅いもの、7のようにひときわ深いも
のとのがある。前者は、口径7.6~8.8センチ、器高1.3~1.5センチ、後者はそれぞれ口径8.0、8.6セン
チ、器高1.1、1.0センチをはかる。7は、口径7.6センチ、器高2.0センチで、口縁部付近に媒が付着し
ており、灯明皿に使われていたことが知れる。8・9は、壺である。それぞれ口径11.0、12.4センチ、
器高2.4、2.5センチをはかる。

10は、白磁の合子である。八角形を呈する蓋に復元できる。11~13は、青磁である。11は、小鉢の
口縁部である。12・13は、銷蓮弁文の碗の体部である。14は、陶器の柄である。赤褐色の粗い胎土に、
茶オリーブ色の不透明釉をかける。

このほか、滑石製の石鍋片、鉄釘などが出土した。これらの出土遺物からみて、13世紀後半の遺構
と考えられる。

115号遺構

2区の南角から検出した遺構である。井戸の掘り方の一部と思われ、1メートルほど掘り下げたが、
完掘仕切っていない。

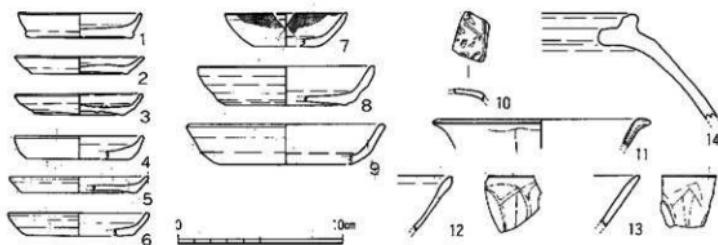


Fig. 16. 114号遺構出土遺物実測図(1/3)

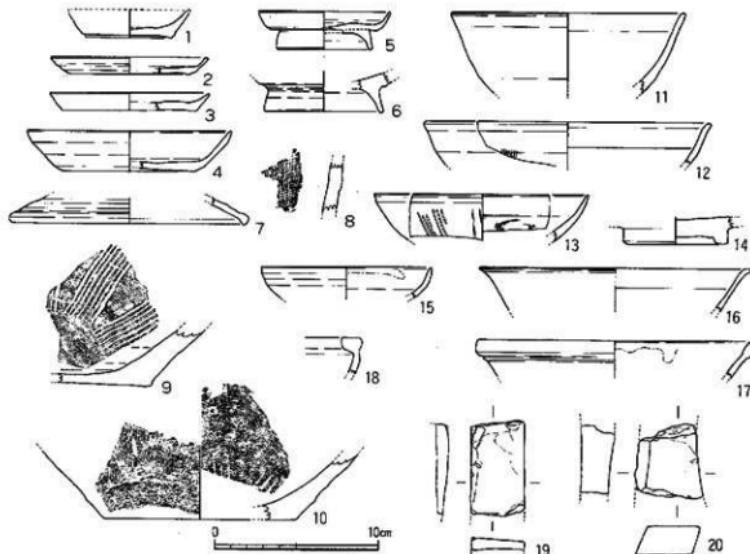


Fig.17. 115号造構出土遺物実測図(1/3)

Fig.17に、出土遺物を図示する。1~8は、土師器である。1~3は、皿である。器高が高い1と、浅い2・3とに分かれる。底部は、回転糸切りである。1は、口縁端部を欠くが、推定口径7.5センチ、器高1.7センチをはかる。2・3は、それぞれ口径9.8、10.0センチ、器高1.05、1.1センチをはかる。これらの内底部には撫で調整が加えられる。4は、壺である。底部は、回転糸切りする。内底部に撫で調整が行われ、外底部に板目压痕がつく。口径12.8センチ、器高2.5センチをはかる。5は、高台付きの皿である。口径8.2センチ、高台径6.0センチ、器高2.3センチをはかる。6は、碗である。「ハ」字形に聞く高い高台がつく。7は、壺蓋である。口縁は、小さく下方に折り返す。横撫で調整がなされる。8は、焼き塙壺の破片である。内面には、布目が強く残っている。外面は、指押さえである。5~8は、下層の遺物が混入したものであろう。9は、備前焼の摺鉢である。底付近は、摩滅している。10は、瓦質土器の摺鉢である。内面は使い込まれてずるずるに擦れており、摺り目はその一部が薄く認められるのみである。

11~14は、青磁の碗である。11・14はいわゆる龍泉窯系、12・13は同安窯系である。15~17は、白磁である。15は皿、16・17は碗である。16には、口縁のやや下に沈線が一条巡っている。17は、口縁を肥厚させて、いわゆる玉縁につくる。18は、陶器の鉢である。灰色の比較的きめ細かい胎土に、オリーブ色の釉を薄く施す。

19・20は、砾石である。肌理が非常に細かく、仕上げ砥であろう。

このほか、鍋蓋弁文の青磁碗などが出土している。

これらの遺物から考へて、13世紀前半頃の井戸造構と考えて大過なかろう。

(6) 第6面

標高4.4メートルで設定した造構検出面である。ここで第6面としたのは、2区第5面と第6面の成果を合わせたものである。すなわち、1区第5面以下に当たる造構検出面の設定にあたっては、1区において第5面以下に設定したトレンチの所見によった。すなわち、第5面整地層の下は、若干の間層をはさんで焼土層となる。この焼土層は固く締まり、下面が黒褐色の焦げた面=火災面となっていた。よって、火災後の復興にともなう地均しの結果が焼土層の堆積になったと考えた。

そこで、2区の掘り下げに当たっては、この火災面を目的とし、火災面に本来伴わない造構を除くために、いったん焼土層上で造構検出を試みることにした。その結果は予想に反し、焼土層上=2区第5面では数基の造構を検出したが、火災面と考えた焦土面=2区第6面ではまったく造構が見あたらなかった。したがって、ここで第6面としたものは、2区第5面で検出した造構を第6面上で調査・実測したものである。

第6面では、7基の造構を検出したに留まった。これらからは、例外なく鎧蓮弁文の青磁や口禿の白磁が出土した。一応、13世紀前半を第6面の年代として考えたい。

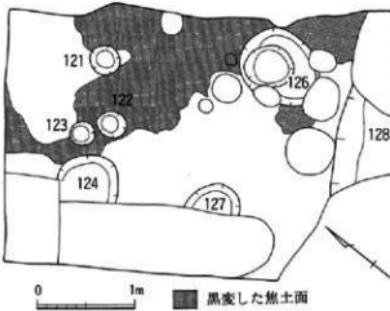


Fig.18. 第6面造構平面図(1/50)



(7) 第7面

標高3.9メートルで設定した造構検出面である。第6面の下には、べたべたで締まりのない灰混じりの茶褐色土が堆積しており、これを剥いだ面を第7面とした。したがって、第7面は暗灰～暗褐色壤土層の上面に当たり、整地層ではない。なお、第6面と第7面の間にある締まりのない土の堆積について、その由来はわからない。しかし、この間にまったく造構が営まれなかつたとも考えがたく、おそらく、継続した生活の営みの中で自然に堆積しものとみみたい。第7面も含めて、生活面が必ずしも整地面を伴っていないというふうに理解している。

136

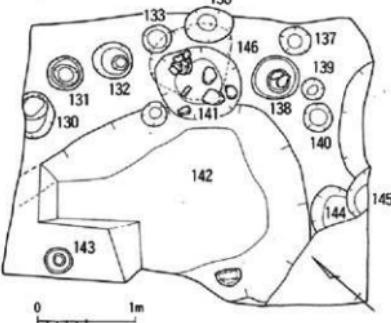


Fig. 19. 第7面造構平面図(1/50)



Ph. 15 第7面全景(南京から)

145号造構—12世紀前半、144号造構—11世紀後半から12世紀初めである。

これらの点から、第7面の年代観は、11世紀後半～12世紀代とおかれる。

141号造構

第7面の中央やや東よりで検出した土坑である。直径75～85センチの略円形を呈し、深さは30センチ前後をはかる。埋土中には、環が投棄されていた。廃棄土坑と考えられる。

比較的多くの遺物が出土しており、Fig.20に図示する。1は、瓦器碗である。単位の不明瞭な幅広の荒磨きが施される。

2～7は、白磁である。2～6は、碗である。2の口縁部は、小さな玉縁につくる。3・4の口縁部下の内面には、細い沈線が巡る。5の外底部には墨書きが残るが、判読できない。花押であろうか。5・6では、体部下位から高台までを露胎とする。7は、盞である。四耳盞であろう。8・9は、青磁の皿である。8は龍泉窯系、9は同安窯系で、9の底部には墨書きがみられる。判読不能だが、文字と花押の組み合わせのように見える。10は、天目茶碗である。黒釉をたっぷりとかける。11～15は、陶器である。11・12は、鉢である。11はオリーブがかった黄灰色、12はオリーブがかった淡褐色の釉を施す。12の口縁部には、重ね焼きの目底が残る。13は、無釉陶器の捏鉢である。外面には、薄く縱方向の刷毛目が見え

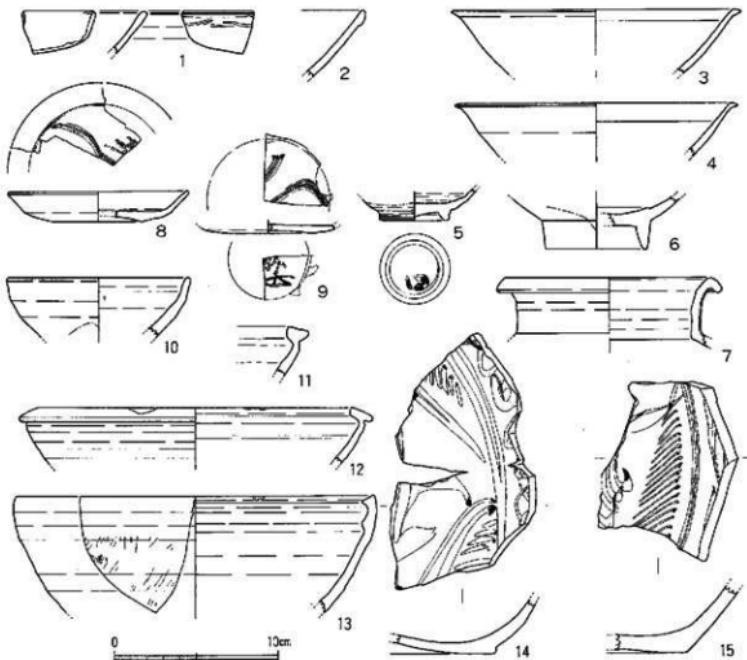


Fig.20. 141号造構出土遺物実測図(1/3)

る。内面は、使用のため摩滅している。14・15
は、黄釉鉄絵の盤である。外面は露胎。

このほか、土師器(底部は回転糸切り)、瓦など
が出土した。

141号造構については、遺物の年代観から、12
世紀後半が与えられる。

142号造構

調査区の中程で検出した大型の土坑である。
全形は知りえないが、床面は平坦であり、おそ
らく長方形の平面を呈した竪穴状の土坑であろ
う。検出した範囲内で短辺220センチ程度、深さ
55センチ前後をはかる。

出土遺物は少ない。

Fig.21-1は、土師器の皿で
ある。底部は糸切り、口
径8.0センチ、器高1.0セ
ンチをはかる。2は、陶器
の体である。灰オリーブ
色の釉が施される。

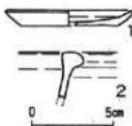


Fig.21. 142号造構出土遺物



Ph.16 142号造構(北西から)

出土遺物と141号造構に切られることから見て、12世紀後半の造構であろう。

143号造構

142号造構の埋土に切り込んで検出された柱穴である。直径30センチ前後の略円形を呈し、中央に径
15センチ弱の柱痕跡を持つ。

出土遺物をFig.22に示す。1・2は、白磁の皿である。
口縁端部の釉を拭き取って、いわゆる口禿に
つくる。ともに完形品で出土した。3・4は、青白
磁の合子である。

このほか、東播系須恵器の鉢などが出土した。
13世紀後半代の造構であろう。

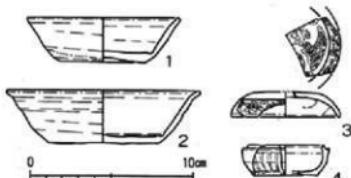
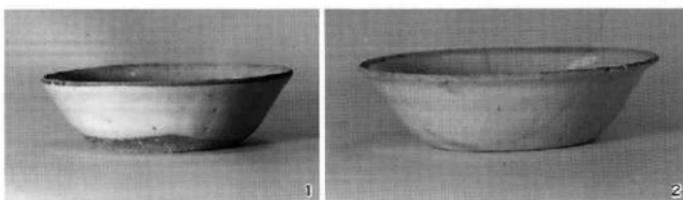


Fig.22. 143号造構出土遺物実測図(1/3)



Ph.17 143号造構出土白磁皿

146号造構

第7面から第8面への掘り下げ途中で、後述する銅の片口鍋にあたり、周囲を精査して検出した土坑である。第7面の136号造構・141号造構の下位にあたる。土坑は、直径80センチ強の略円形を呈する。確認した深さは15センチ程度だが、銅鍋の出土位置からみて、本来30センチ以上はあったはずである。

鍋は、土坑の西壁に接して、床面から5センチほど浮いた状態で出土した。埋土中に埋納されたものと思われる。鍋は、下から鉄鍋1、銅鍋2が片口の方向と、釣り手を倒す方向をそろえて重ねられていた。埋置するにあたっては、片口は正しく南を指しておかれている。出土状況では、鍋は南に傾いて若干ずれており、箱の上におかれただけが、箱の腐朽にしたがって、落ち込んだものとも見える。しかし、箱の存在を示す手がかりはまったくなく、また他の遺物が出土していないので、確認もできない。一応、そのような可能性を提示するにとどめたい。

なお、鍋の中の土からは、何も検出できなかった。また、鍋の間はほとんど隙間なく重なっていたために、中空に近い状態であった。

Fig.24～26に、重ねられていた順に上から、鍋を報告する。

1は、一番上におかれている銅製の鍋で、造存状態は最も良い。鍋本体は、片口部分までが同鍋で、これに釣り手金具を鉄

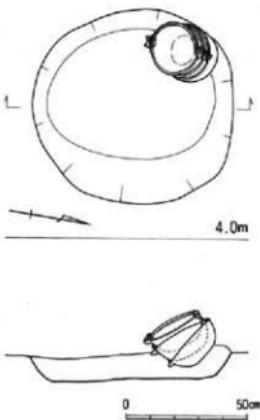


Fig.23. 146号造構実測図(1/20)



Ph.18 146号造構 銅・鉄鍋検出状況(南から)



Ph.19 146号造構完掘状況(東から)



Ph.20 146号造構鉄・鉄鍋出土状況(北から)

留めする。片口の付け根の部分には、細かい刻みを持つ二条の文様帶と花弁が陽鋳される。これに「コ」字形の釣り手金具が取り付けられるのだが、金具がはまる部分の花弁文は、その部分だけ初めから除かれている。釣り手金具は、鍋本体の曲面や縁の部分にぴったりとはまるように、あらかじめ湾曲をつけ、凹凸をつけて鋳造されている。片口側の金具は、リベットで両側の二箇所を留める。この反対側の金具は、全体が同鉢の銘になっており、これを本体の孔に通し、さらに内側に座金を当てて、銘の頭をつぶして締める。釣り手も錫銅製で、両端から弧を描いて突き出した鉤状の枝を釣り手金具の孔に通す。したがって、釣り手を釣り手金具に通してから、本体に取り付けることになる。釣り手の断

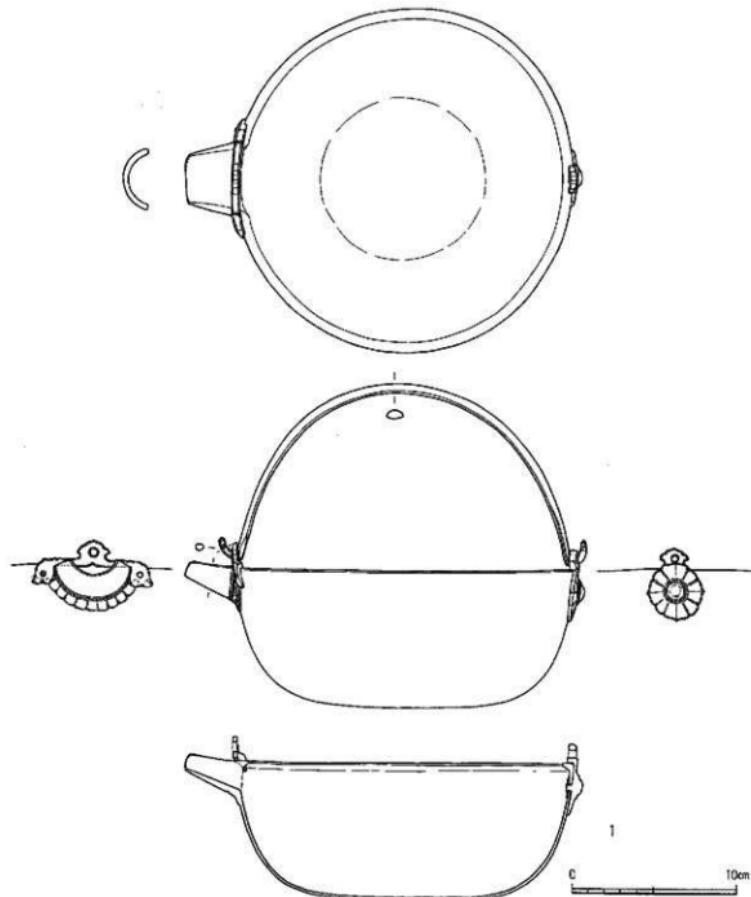
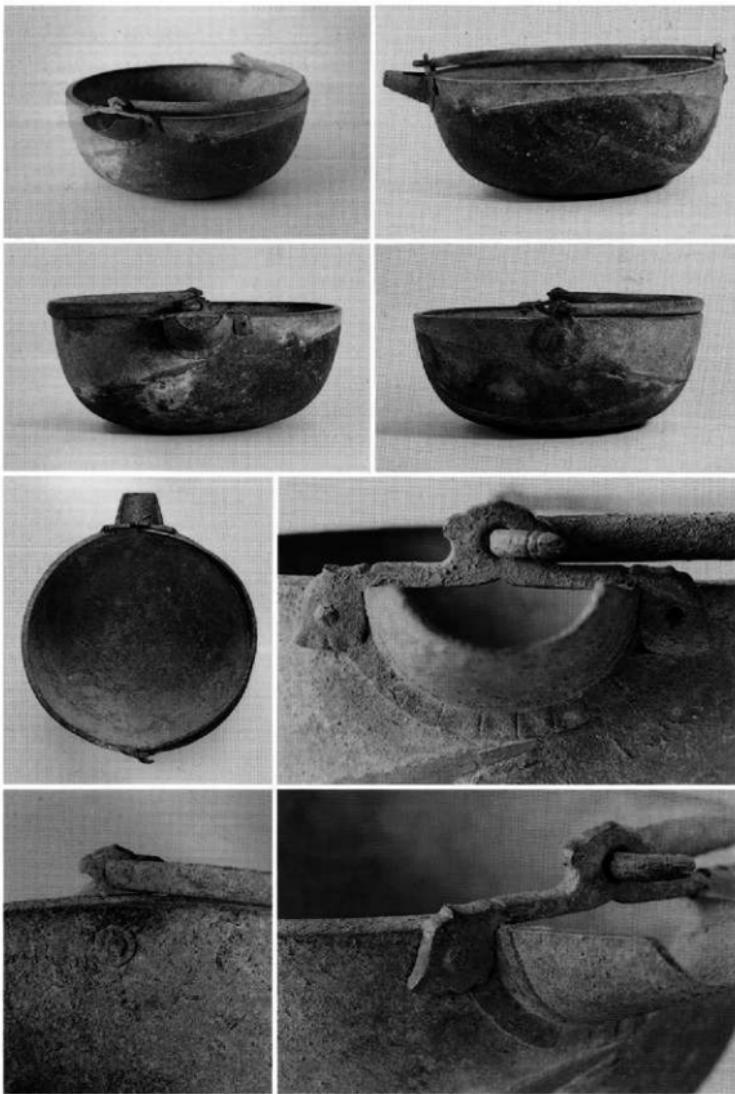


Fig. 24. 146号遣構出土遺物実測図 1 (1/3)



Ph.21 146号達構出土銅製的手付片口鍋

面は蒲鉾型だが、両端近くは面取りして長方形に近くなる。ここから断面円形の鉤が突き出す。鉤の先端は、土筆状に飾られる。鍋本体の口径は約21センチ深さは8.5センチをかる。

2は、二番目に重ねられていた銅製の鍋である。底部は、下になっていた鉄鍋の錆で侵食され、いびつに破損している。片口は本体と同鉢だが、片口付け根に装飾はつけられていない。この部分の装飾は、釣り手金具の方に鋲出されている。すなわち、この釣り手金具は、1の鍋とは異なって、釣り手金具に片口を差し込む形で取り付け、リベットで留めている。もう一方の釣り手金具も、1の鍋とは異なる。2では、釣り手金具と中央の菊座の部分が別鉢で菊座がそのまま鉢となり、釣り手金具と本体の孔を貫通して、本体内側で鉢頭をつぶして締めている。それぞれの装飾のパターンは共通するが、2の釣り手金具では、菊座の外側の花弁に透かしが入るなど若干の相違点がみられる。釣り手の形状もほぼ一致するが、2では鉤の部分に装飾ではなく、弦に竹の節状の刻みが入っている。本体の口径は、約21セ

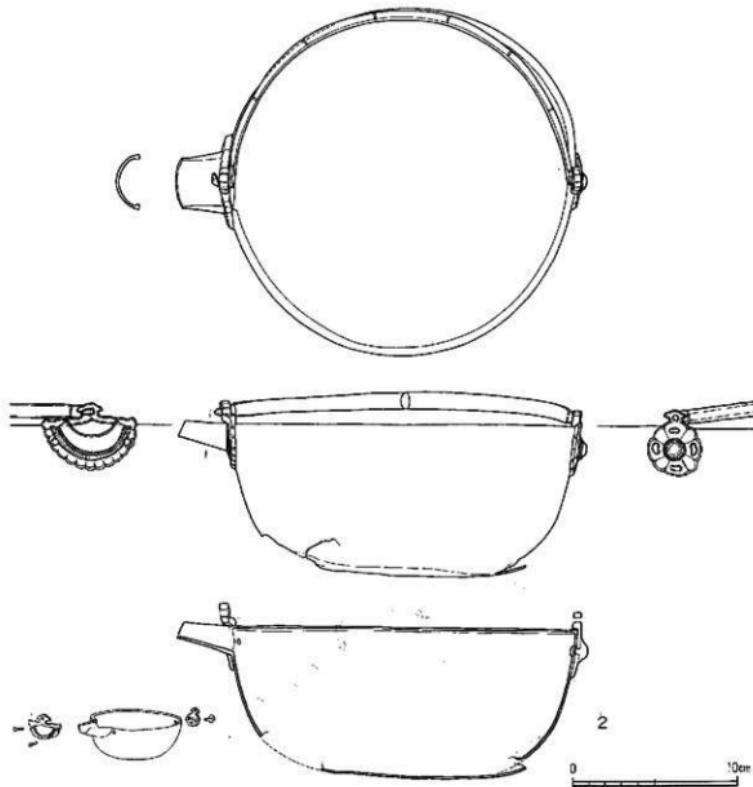
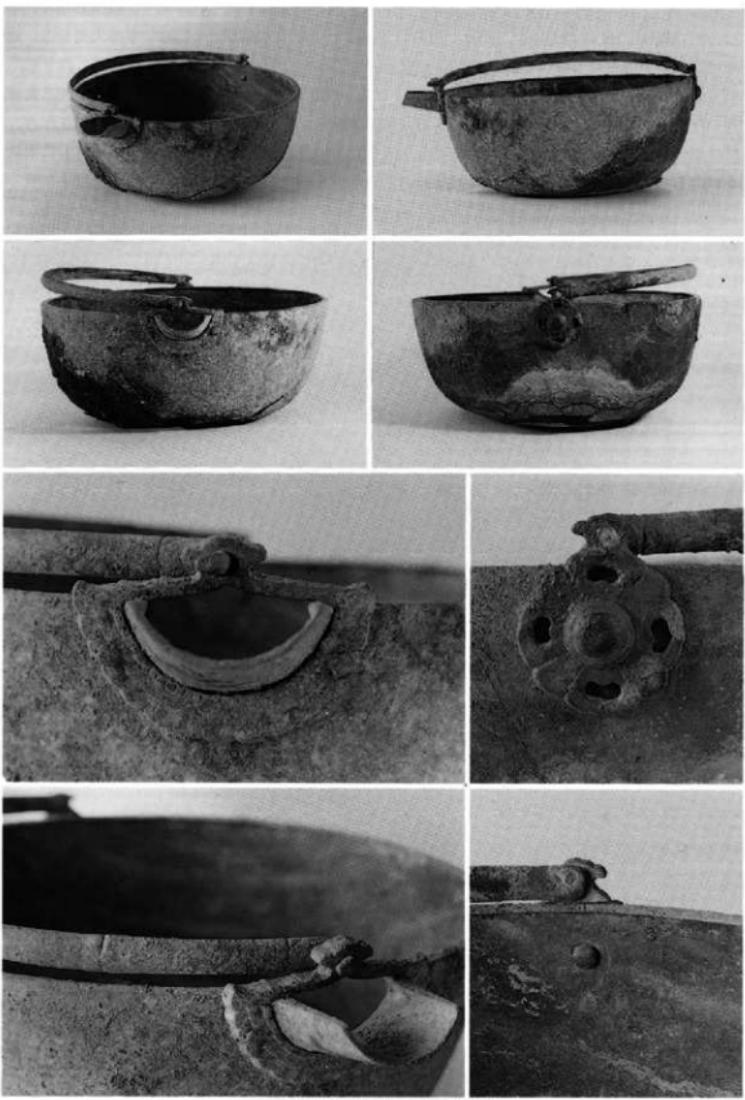


Fig. 25. 146号遺構出土遺物実測図2(1/3)



Ph.22 146号遺構出土銅製鉢手付片口鏡2

ンチ、深さは9センチ前後で1と同型・同大といって良かろう。

3は、最も下におかれていた鉄鍋である。遺存状態は、銅製鍋と比べれば悪く、破損も見られる。特に、2の銅製鍋と接着していた、釣り手側の口縁部において痛みがひどく、釣り手の大部分と、口縁端部は崩れて欠失してしまった。鉄鍋は、銅製鍋とは違って、装飾性に乏しく、片口から釣り手の受け部分までを同鋲している。わずかな装飾としては、口縁部の下と、胴部の中程にそれぞれ三条の隆起線を陽鋲しているくらいである。釣り手は、鍋本体から半円状に突起した受け部分に通される。この受け部分は、片口側では本体との接点部分を欠失しているため明らかではないが、片口上に横状に渡されたものと推定される。釣り手は鍛造で、断面はやや蒲鉾型がかった長方形、両端近くに半って幅を減じ断面方形となり、受け部分に通される。歪がひどいが、本体の口径は、21センチ前後、深さ8.8センチ程度で、銅製鍋と同大といえる。

土器の類が出土していないが、遺構の重層関係から12世紀後半を下ることはない。

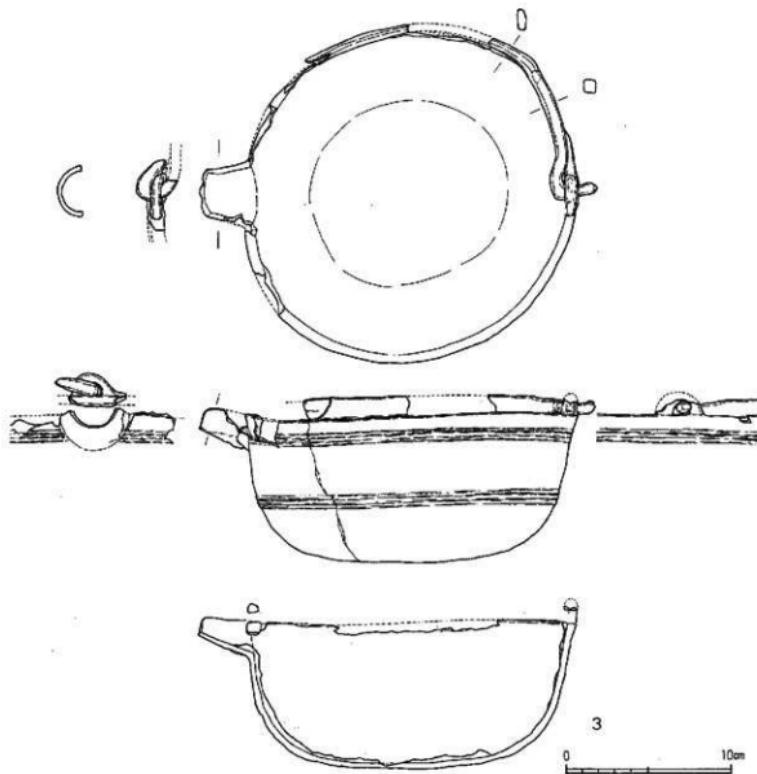
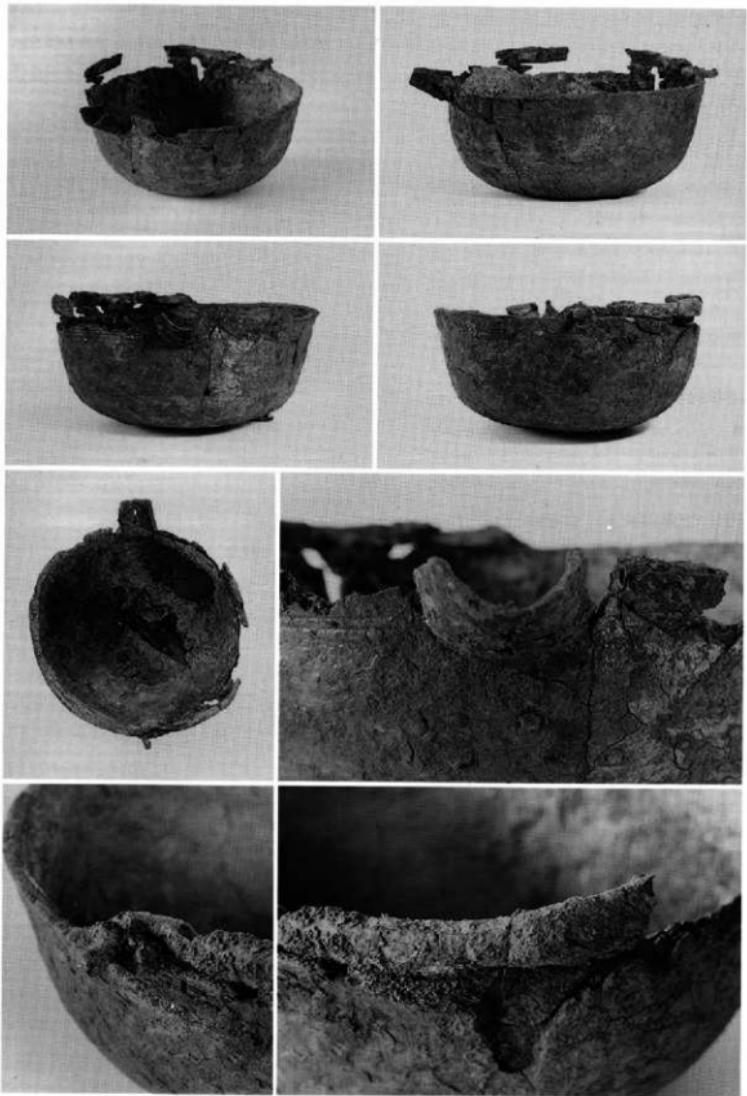


Fig. 26. 146号遺構出土遺物実測図 3(1/3)



Ph.23 146号造構出土鉢形鋤手付片口銅

(8) 第8面

標高3.15メートル前後で設定した造構検出面である。同時に、博多遺跡群の基盤層である砂丘砂の上面にあたる。第7面から75センチ前後掘り下げているため、上面での掘り残しを調査する可能性はきわめて低いと思われる。

第8面では、柱穴・土坑・土壙墓を検出した。柱穴は、一見して調査区の南側に集中するが、調査区の北半分では大型の土坑の切り合いが激しく、柱穴が飛ばされてしまった可能性もある。

おおまかに各造構の時期を記す。最も下で検出した造構は、後述する169号造構である。不整形の性格不明の土坑であるが、7世紀末におかれよう。153号造構は、焼き塙臺をしており、8世紀～9世紀におかれ。152号造構は、実測図では153号造構に切られて見えるが、造構検出において153号造構を切っていることを確認している。時期の決め手を欠くが、9世紀代において大過ないだろう。このほか、柱穴から出土した須恵器なども、8～9世

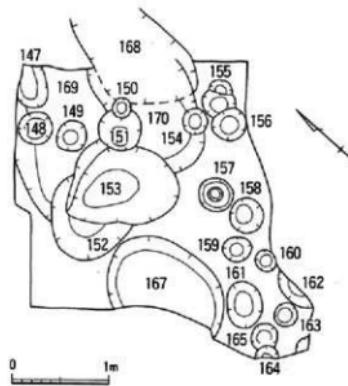


Fig. 27. 第8面造構平面図(1/50)



Ph. 24 第8面全景(南東から)

紀を示しており、第8面の時期もこのあたりに求められよう。

153号遺構

調査区は中央で検出した、不整円形を呈する土坑である。長径120センチ、短径95センチ、深さ60センチ前後。用途は判断できない。

出土遺物は少ない。Fig.28-1は、須恵器の环蓋である。混入遺物であろう。2・3は土師器である。2は、甕の口縁である。3は焼き塙壺で、内面には布目が残る。

8~9世紀代の遺構と考えられる。

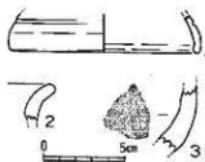


Fig. 28. 153号遺構出土遺物
(1/3)

167号遺構

調査区の西壁付近で検出した土坑である。長軸185センチ、短軸95センチの小判型を呈し、深さ25センチ前後をはかる。用途は不明である。

出土遺物をFig.29に示す。1・2ともに土師器の甕である。1は、「く」字形に外反した口縁を持ち、口

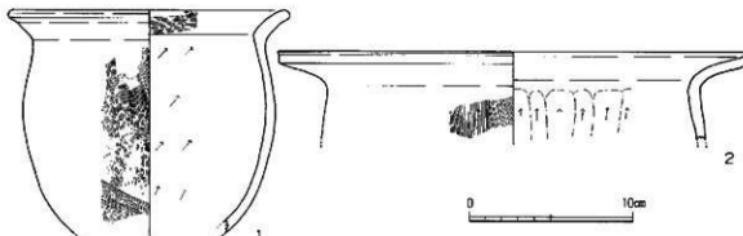
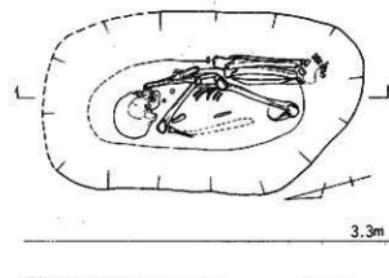


Fig. 29. 167号遺構出土遺物実測図(1/3)

径17.6センチをはかる。口縁部内面は横刷毛、
体部内面は右上がりの斜め削り、口縁部外面は
横撫で、体部外面は縱方向の刷毛目調整する。
2は跳ね上げ口縁状に面取りされた口縁を持ち、
口径29.4センチである。口縁部の内外面は横撫
で、体部外面は縱刷毛、体部内面は縱に削り上
げる。

8~9世紀代の遺構と考えられる。



168号遺構

1区と2区にまたがって検出した土塙墓である。頭部側の墓壙の一部は、1区の調査区壁面にかかっていて検出できなかった。

墓壙は、推定で長軸130センチ、短軸75センチの不整長方形を呈し、検出面からの深さは、22

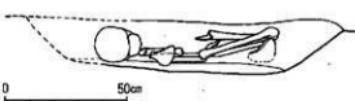


Fig. 30. 168号遺構実測図(1/20)



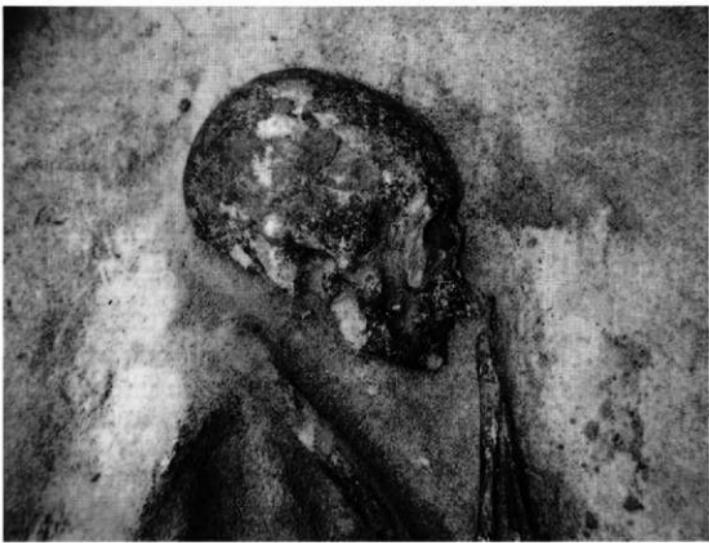
Ph.25 168号遺構(南から)



Ph.26 168号遺構(東から)



Ph.27 168号造構入骨抜き状況(東から)



Ph.28 168号造構入骨抜き状況(南から)

センチをはかる。この墓壙の中央に、熟年の男性の遺体が埋葬されていた。

遺体は、頭位をほぼ真北にとり、顔を東に向けて埋葬されていた。手足をかなり強く折り曲げた屈葬である。副葬品はなく、塚土中から須恵器や土師器窯の小破片が出土したに留まる。

わずかに出土した遺物と、他の遺構との切り合い関係などから8~9世紀に属することは間違いない、8世紀後半~9世紀初頭におさまる可能性が高い。

なお、埋葬遺体については、九州大学の中橋孝博氏より所見をいただいているので、そちらをご覧いただきたい。

169号遺構

もっとも下位で検出した土坑である。土坑同士の切り合いのため、壁の大部分を失っており、西壁の一部を検出したにすぎない。全体の形状は不明である。

出土遺物をFig.31に図示する。1は、須恵器の壺蓋である。口縁の内側に小さな返りが付く。内外面とも、横撫で調整される。2・3は、土師器の窯である。3は、口縁部内面を横位の刷毛目調整、体部内面は右上がりの斜め方向の削り、体部外表面は縦の刷毛目、口縁部外表面は縦刷毛を横撫で調整で消している。

これらの出土遺物から、7世紀後半の遺構と考えて大過ないだろう。

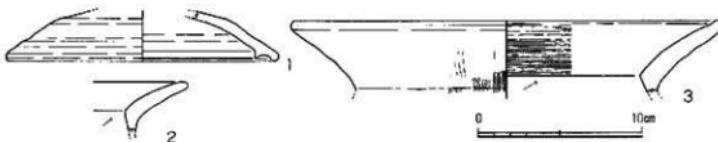


Fig. 31. 169号遺構出土遺物実測図(1/3)

(9) その他の出土遺物

これまでに触れられなかった遺物のうち、重要なと思われるものについて、簡単に紹介する。出土遺構・層位については、図中に示す。

Fig.32-1~3は、越州窯系青磁である。1は、玉壁高台の碗で、全面に施釉する。3は、壺の胴部で、外面に片切り彫りで文様（花文？）を描く。2は、天目茶碗である。暗茶色の釉をかける。火にかかっており、釉の表面は荒れている。体部外表面の下半分は、露胎となる。4は、古瀬戸の鉢皿である。灰緑色の透明釉が、うすくかかる。鉢口の部分には、砂が付着し、使用した痕跡はない。5は、常滑焼きの捏鉢である。須恵質の焼成で、灰色を呈する。6は、増壙である。鉢形を呈する。底部は、丸底であろう。口縁は、尖り気味におさまるが、部分的に内側に折れ曲がる。土師質に焼成されるが、火熱を受けて、焼き縮まっている。7は、焼き塩壺である。内面には、きめの細かい布目がみられる。8~11は、墨書き資料である。8は須恵器で、高台付き壺の底部であろう。外底部のはば中央付近に「五月」と墨書きされている。9は、白磁の高台付き皿である。見込みは、蛇の目状に釉剥ぎする。体部外表面の下半分から高台にかけては露胎で、この外底部に「六」と墨書きされている。10は、土師器の壺である。底部は、回転糸切りされる。底部の外表面に墨書きが残る。墨書きは若干かれており、文字の一部分という可能性も考えられるが、現在見えている限りでは、「二」であろう。11は、白磁の碗である。見込みの釉を蛇の目状に搔き取っている。体部の外表面は高台のや上あたりから露胎となるが、この部分に墨書きされている。墨書きは、半ばが釉に乗っているため飛んでしまい、判読できない。

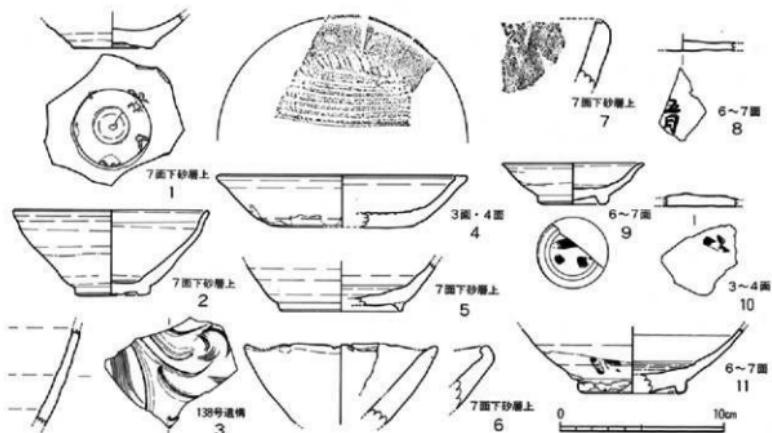
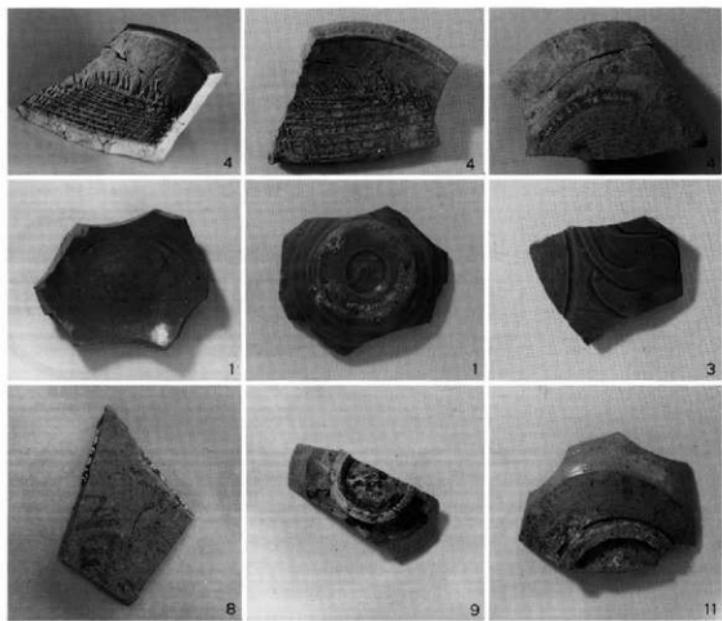


Fig. 32. その他の出土遺物実測図(1/3)



Ph.29 その他の出土遺物(縮尺不同)

⑩ 銅銭

今回の調査では、総数で28枚の銅銭が出土した。鋳がひどく錢文が見えないものが多いが、錢文が判読できた16枚の内の半数が北宋銭である。また、錢文が明らかなもので見る限り、明銭がまったく出土しなかった。本調査地点では、15・16世紀の遺構・包含層が遺存しており、それにも関わらず明銭がみられなかった点には、注目していく必要があろう。

表1 出土銅銭一覧

錢貨名	王朝名	初銭年	西暦	枚数	錢貨名	王朝名	初銭年	西暦	枚数
開元通寶	唐	武德4年	621	2	元豐通寶	北宋	元豐元年	1078	2
咸平元寶	北宋	咸平元年	998	1	元符通寶	北宋	元符元年	1098	1
皇宋通寶	北宋	寶元2年	1038	1	崇寧重寶	北宋	崇寧3年	1104	1
熙寧通寶	北宋	熙寧元年	1068	1	寛永通寶	日本	寛永3年~	1626	6
熙寧元寶	北宋	"	"	1	解説不能				12

(総数 28)

表2 遺構別出土銅銭一覧

面	区	遺構番号	分類	枚数	備考	面	区	遺構番号	分類	枚数	備考
2面	1区	025	解説不能	1		4面	2区	048	熙寧元寶	1	
3面	"	031	"	1		"	"	115	解説不能	1	
"	2区	077	"	1		5面	1区	057	"	1	
"	"	089	"	1		7面	2区	145	皇宋通寶	1	
4面	1区	048	咸平元寶	1							



開元通寶
2区-3面~4面



咸平元寶
1区-4面~048



熙寧元寶
2区-7面



寛永通寶
2区-4面~048



元豐通寶
2区-表土にさ



元符通寶
1区-4面



元符通寶
1区-カクラン①~4面-042



崇寧重寶
5区下-表土層



寛永通寶
1区-表土



寛永通寶
2区-表土にさ



寛永通寶
2区-表土にさ



寛永通寶
2区-表土にさ

Fig. 33. 出土銅銭拓本(1/1)

第三章　まとめ

以上、博多遺跡群第84次調査について、その概要を述べてきた。最後に、調査成果の簡単なまとめて、若干の問題点の指摘を試みたい。まず、本調査で明らかになったことを簡条書きにする。

1. 本調査地点における遺構の初見は、7世紀末である。8世紀から9世紀の遺構は、第8面において検出された。この面では、同時期の土壙墓が検出され、埋葬人骨が出土した。
2. 9世紀後半から11世紀前半にかけての遺構は、見られなかった。
3. ついで、遺構がみられるようになるのは、11世紀末頃以降である。12世紀後半を除く土坑から、銅製鍋と鉄製鍋が出土した。
4. 13世紀中頃もしくは後半以後、灰色粘土を敷いた整地が、たびたびなされている。14世紀前半頃に比定できる第4面では、差し渡し20~30センチほどの比較的大きな石を礎板に用いた建物が建てられていた。
5. 16世紀代に入り、道路が通された。この道路は、16世紀末まで継続し、その後廃されている。16世紀代の第2面・第1面では、礎石建ちや礎板を用いた建物は見あたらない。

以下、このまとめに関連して、若干の検討を加えたい。

(1) 古代の遺構について

博多遺跡群が立地する砂丘地形は、大きくて博多浜と息浜のふたつにわかれます。本調査地点は、この内博多浜の北東端近くに位置している。これまでの調査例から博多遺跡群の時代的変遷を追うと、博多遺跡群に遺構が出現した弥生時代中期には、博多浜の頂部付近に集落が営まれていた。この段階では、息浜は海面からわずかに顔をのぞかせた程度であったと推定されている。とはいえ、息浜を博多浜に対する障壁として、また、風浪の影響を受け易い水際を避けて選地されたのは明らかであろう。

古墳時代前期の集落は、博多浜頂部から南側にかけて展開している。これは、海側からみると博多浜頂部の陰にはいる形となり、弥生時代の集落と同様の選地がなされたものと言えるだろう。

ところが、奈良時代になると、遺構は博多浜全体に拡散するようになる。この時期については、博多浜南部では東西・南北の溝による区画が行われているようで、博多浜南部に何らかの官衙、北部に居住城を認める説もある。いずれにしても、これまでの調査で知られていた博多浜北辺・西辺に加えて北東側でも浜の縁近くまで、遺構が広がっていたということが、確認できたと言える。

また、第8面からは8世紀後半から9世紀初頭と思われる土壙墓が見つかった。特に埋葬姿勢には、注目される。博多遺跡群でこれまで得られている例では、第62次調査で10世紀初め頃の木棺墓がある。わずかに残った人骨からみて、遺体はわずかに膝を立てて仰臥屈肢葬であった。11世紀代の検出例や、12世紀以後13世紀と続く中世前半の土葬墓においても仰臥屈肢か、西面した右側臥屈肢葬が採られている。本調査例のような極端な屈葬は見あたらず、北頭西面を意識していないことも含めて、古代における葬法の変化を見る上で興味深い資料である。今後の類例の増加を待ちたい。

(2) 146号遺構出土の鍋について

146号遺構出土の銅製鍋・鉄製鍋は、博多遺跡群では希な金属製鍋の発見であった。実は、これまでも鉄鍋の出土はあったが、遺存状態が悪く、報告されたことはない。また、銅製の鍋としては、初例となった。それぞれの鍋について、報告文中で触れているので、ここでは、これらの鍋に関連した

博多遺跡群における周辺資料について述べる。

同様の釣り手付き片口鍋が、博多遺跡群第83次調査で出土している。銅製の鍋で、詳細に付いては報告書を参照していただきたいが、本調査出土例と異なる点は、本体の底部がやや角張って、平底に近づいていること、釣り手を有する部分が本体と同鉄であることである。時期は16世紀に属する。

第62次調査からは、釣り手金具が出土している。本調査例のFig.24-1の片口側の釣り手金具と同様のものである。

第80次調査からは、片口鍋の鋳型が出土した。底部は張り気味で、83次調査の銅製鍋に通じる。14世紀後半とされている。

第85次調査でも鍋の鋳型が出土している。ただし、口縁部が外反するもので、本調査例や、83次調査例とは異なる。鍋としては、片口鍋と柄付き片口鍋がある。15世紀と考えられる。なお、鋳型がまとまって廃棄されていた土坑から、真土と思われる肌理の細かいしっとりとした砂が出土した。取り瓶、ふいごの羽口も共伴している。

これらの事例は、わずかな例ではあるが、博多において銅製や鉄製の鍋が普及していた可能性を示すとともに、博多の都市域において、生産されていたことを物語るものである。本調査出土の鍋は、それが12世紀後半以前という中世の早い時期に遡るとともに、ほとんど同タイプの同機能の鍋を材質を替えて作るというのみならず、細部の意匠や釣り手の細工などを少しだけ違えてつくるという趣味性すら感じさせる生産が行われていたことをうかがわせる資料と言えよう。

(3) 中世後半期の景観

本調査地点における中世後半期の景観について考えたい。

中世後半の博多遺跡群の都市景観については、発掘調査で検出した道路遺構を手がかりにこれまで機会をとらえては考えてきた。ここで、それを繰り返すのは、紙数の無駄になるので、本調査地点に関連する要点だけ、述べておく。

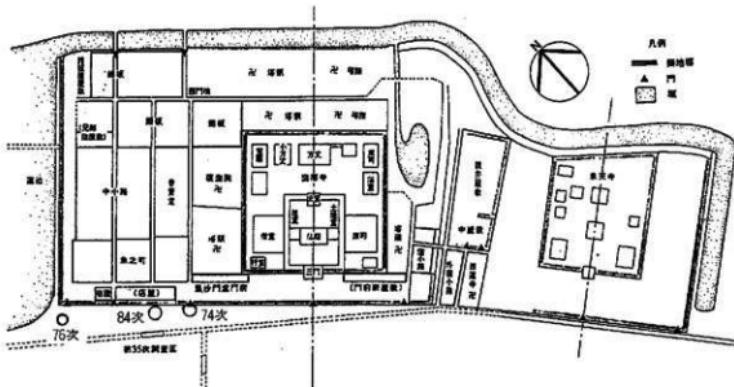


Fig.34. 聖福寺寺中町推定復原図

(宮本1991に加筆、74次・75次・76次・84次調査地点はおおよその位置を示す)

「博多」においては、13世紀末から14世紀初頭に実施された道路整備によって、縦筋（南東一北西）の基幹道路と、それをつなぐ支線道路が作られた。これらの道路は、16世紀末九州平定を終えた豊臣秀吉によって町割りがなされるまで、その場所をほとんど変えずに受け継がれた。

第84次調査地点の西側には、博多浜を縦貫して息浜にいたる、いわゆる博多のメインストリートが通っていた。この幹線道路の東側には南から承天寺・聖福寺などの博多を代表する大寺院が並んでいた。豊臣秀吉の太閤町割を色濃くとどめる現在の街路＝御供所通りも聖福寺・承天寺の前面を通りっている。中世においても、聖福寺・承天寺は幹線道路に面していただろう。現在の第84次調査地点は御供所通りの西側となるが、中世では幹線道路の東側すなわち聖福寺側に当たっていた。

ところで、中世末期の聖福寺には、その北側に寺中町が付属していた。聖福寺には、「安山僧家牒」とよばれる寺中町からの徵税台帳と、「聖福寺古図」という絵図が伝わっている。いずれも16世紀中頃のものと推定され、寺中町の様子を知る第一級の史料である。「聖福寺古図」では、聖福寺北側の寺中町は、梯子状の道路とそれに面した家並みとして描かれる。

「安山僧家牒」と「聖福寺古図」を検討した宮本雅明氏は、両者から16世紀中頃の聖福寺境内をFig.34の様に復元した。本調査地点は、この復元図の普賢堂北側の道筋に当たる。宮本氏は、この復元図では幹線道路と聖福寺の築地塀との間に若干の余地を設けている。ただし、同時に築地塀を幹線道路に面させる復元の可能性も指摘している。本調査の成果によれば、普賢堂の道は、Fig.34の復元よりも幹線道路方向に延びていたはずで、後者の復元案を指示するものといえよう。

宮本氏によれば、普賢堂は、片側町であるという。さらに、近世では扇子流に屬し、博多の七扇子のひとつに数えられる点から、両側町の中小路が先に形成され、普賢堂は遅れて扇子として開発されたと推測している。

これによって、本調査の成果を見るとどうであろうか。まず、16世紀代の遺構検出面である第2面よりも下位では、道路構造はみられなかったことがあげられる。同じく聖福寺の寺中町にあたる第74次調査で検出された道路は、14世紀前半に作られ、16世紀末まで続いている（[†]博多46）。14世紀前半という時期は、博多で道路が整備された13世紀末～14世紀初めからさほど隔たらぬ時期である。また、



Fig.35. 聖福寺寺中町周辺道路遺構(1/4,000)

鎌倉時代初期に創建されたという聖福寺は、当然すでに存在していた。してみると、本調査での道路遺構は、かなり遅れて通されたものと見なくてはならない。調査面積が狭く、道路の両側、特に北側はほとんど調査できていないので、残念ながらこれが片側町であったか否かは、確認できていない。少なくとも、菩賢堂道が16世紀に入って辻子として通されたことはまちがいないと言える。

それでは、辻子としての菩賢堂道が通される以前の状況はどうだったのだろうか。13世紀後半の第5面以後たびたび全面にわたって粘土を貼った整地が行われていることに注目したい。さらに第5面・第4面では偏平な石を礎板や礎石に用いた建物が、第3面では柱の根固めに石を充填した建物が建てられていた。これらのこととは、この場が、一般住宅とは異なる建物空間であったことを示すと言えるのではないだろうか。類似の状況は、先に触れた第74次調査においても確認されている。第74次調査の報告によれば、14世紀代には道路に面して大型の建物区画があったが、15~16世紀には道路に面して掘立柱建物が疊らに建っていたと言う。また、聖福寺の北限を調査した第76次調査の所見では、14世紀には築地塀が築かれていたが、15世紀にはすでに崩れて板塀にかわり、16世紀には掘立柱建物が数棟見られるようになる(博多40)。

本調査における整地と建物、第74次調査における大型建物区画の存在などは、これらの地点が聖福寺あるいはそれに関連した宗教的施設(塔頭・子院など)の敷地であったことを示すのではなかろうか。聖福寺には、盛時には子院が38あったという。これらは現在ほとんど残らず、その場所さえ伝わっていない。聖福寺の北東は、かつて低地であったと推測される。南東は、ほどなく承天寺の寺域となる。南西側には、聖福寺の前面を通って幹線道路が通り、その向かい側には奥堂氏屋敷をはじめ商人町人の家並みが広がっていた。そうすると、多数の子院が建てられる余地は、北西側、16世紀に寺中町があったその場所しか考えられない。本調査や第74次調査の成果は、この推測を支持しているものと言える。

紙数が尽きかけているので結論を急ぐ。12世紀末もしくは13世紀初頭に創建された聖福寺は、次第に拡大して多数の子院をその北西側に展開した。聖福寺が建立された時、すでに聖福寺前面の幹線道路(13世紀末~16世紀末)に先行して、溝による区画が存在していた。幹線道路は、位置的にはそれを踏襲したものであり、聖福寺自体もそれに規制されたであろうことは推測に難くない。聖福寺は、14世紀には博多浜の北限ぎりぎりまで拡大し、ここに築地塀を設けた。しかし、15世紀以降、室町幕府の弱体化の中で博多は有力な守護大名の争奪の対象となり、聖福寺も盛時の寺容を維持できなくなっていく。築地塀はほこりび、やがて板塀にと変わっていく。子院の敷地にも、博多の市中からあふれでた零細な商人・職人がはいりこんで、次第に町場と化していくと思われる。一方、聖福寺側は、この流れに歯止めをかけることはできず、むしろこれを取り込むことを考え、菩賢堂道を通り、町場を再編したのではないかろうか。おそらく、その成果を示すものが「安山借家譲」なのである。本調査地点での所見は、この推測を如実に物語っている。

こうして編成・掌握された町場の住人は、本来聖福寺に対する信仰的な縁帶を有する人々とは限らなかったと思われる。この点が、一向宗寺院に見られる寺内町との本質的な違いと言える。本稿で、聖福寺北東のこの領域に近世以降伝わる町名をとって、寺中町と呼んできた由緒である。

大庭康時 1994 「博多ー中世の商業都市」 錦倉考古学研究所編『中世都市錦倉を読む』 日本エディタースクール出版部
1995 「大陸に開かれた都市 博多」 細野善彦・石井進編『中世の風景を読む7 東シナ海を囲む中世世界』

新人物往来社

福岡市教育委員会 1993 「博多40」 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第332集

1995 「博多46」 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第395集

宮本雅明 1991 「中世後期博多聖福寺境内の都市空間構成」『建築史学』17

博多遺跡群第84次調査出土の古代（8～9世紀）人骨

中橋 孝博

九州大学大学院比較社会文化研究科

はじめに

博多は古代より日本でも有数の港町・商都として栄えた長い歴史を持つが、これまでの長年にわたる発掘調査によって、弥生時代から近世にいたる多数の古占骨資料を出土し、この町に居住した人々の形質上の時代変化や地域性に関して興味深い情報を提供してきた。いわゆる渡米系弥生人の分布域の中心部でもあり、その特徴が時代と共にどのように変化したのか、あるいは、かなりの規模を持つ港町、商都としての住環境が、そこに伴む人々の形質にどのような影響を与えたのか、この街を舞台にした人類学上の課題は多岐にわたる。

1994年の夏、旧博多市街区の御供所町における福岡市教育委員会の発掘調査によって、新たに8～9世紀所属の占骨一体が出土した。わずかに一体ではある、得られた情報は限られたものではあるが、全国的にもごく稀少な時期の資料であり、今後の研究にとってその出土の意義は決して小さくはない。以下に、人骨資料の検討結果を報告する。

資料・方法

遺跡・資料：博多遺跡群第84次発掘調査は、1994年の夏、福岡市博多区御供所町二丁目において実施され、8世紀後半から江戸時代に亘る多くの遺構、遺物が出土した。占骨はその最下層に近い位置で検出され、他の遺構・遺物との層序関係から、8～9世紀初頭の遺骨と考えられている。

埋葬姿勢：頭位をほぼ北にとり、顔面を左（東）に向けた左側臥屈葬の姿勢で検出された。上肢は肘を胸の前で曲げ、手を丁度顔面の前に、下肢も膝を胸に引き寄せるようにして強屈している。副葬品は無い。

性・年齢：頭蓋の眉間部や各筋付着部の発達の程度、四肢の太さ、及び大座骨切痕の開きは、いずれも男性的特徴を示している。また、歯の咬耗や縫合の癒着の程度から、熟年に達した個体と推定される。

方法：計測は主にMartin-Saller (1957) に従い、その他頭蓋の一部にHowells (1973) の、鼻根部には鈴木 (1963) の方法を用いた。また、脛骨には森本 (1971) の方法を採用した。

結果

頭蓋骨：計測結果について、比較群と共に主な項目を表1に示した。また、西南日本現代人（原田、1954）を基準線とした偏差折線を図1に示した。

眉間部は強く膨隆し、乳様突起の発達も良好で、かなり逞しい男性像が想起される。

計測値で目立つのは、著しい長頭傾向で、その頭最大長は194mmと、比較群の平均値を大きく上回っている。また逆に最大幅は著しく狭く、その示数は68.0と、過長頭型(hyperdolichokran)に入る。頭高は同地方の中世以降の集団に較べてやや低く、占墳入などの、より時代的に遅い集団に近い。上記の頭最大長、最大幅に見られた傾向を反映して、頭長高、幅高示数もそれぞれかなりの低、高示数値となる。

頭面部では、著しく偏平な鼻根部と、低顎傾向、それに歯槽性突顎が目立つ。上顎高は68mm、顎高は112mmで、これまで同地域から出土していた、弥生～近世の人の骨群に較べてかなり低い。ただ、頬骨弓幅も狭いため、Kollmanの示数值で見た場合、他の中世、近世人骨とそれ程大差は見られないが、Virchowの示数值ではやはり相当の低顎傾向が表れている。

鼻根部の弯曲示数(50/F)は93.3で、著しく扁平である。鼻骨自身の弯曲もごく弱く、いわゆる鼻梁の隆起、傾斜は殆ど見られない。

眼窩部では、主に高径が低いために強度の低眼窩傾向を示し、鼻型にもかなりの広鼻傾向が見て取れる。いずれも比較群との間に大差が認められる。

一方、上顎齒槽部の突出は顕著で、その側面角は55度と、やはり突顎で知られる他の中世集団と比較しても、差が大きい。この顕著な突顎傾向のため、咬合形式はいわゆる星丈咬合となっている。

体部骨：一応は全身各部の破片が遺存しているが、保存状態が非常に悪く、その形態を観察できたのは骨盤と、下肢骨の一部に限られた。

大腿骨の中央部矢状径は28mm、横径は27mm、周径は86mmで、同地域の弥生人など（北部九州弥生人

表1 主要頭蓋計測値の比較（男性）

	博多84次 (古代)	博多26次 ²⁾ (中世)	北部九州 ³⁾ (古墳)		席田青木 ³⁾ (近世)		天福寺 ⁴⁾ (近世)		吉母 ⁵⁾ (中世)		西南日本 ⁶⁾ (現代)	
			N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1 頭蓋最大長	194	187	48	182.8	32	184.4	38	182.6	16	181.8	108	181.4
8 頭蓋最大幅	132	137	51	141.7	32	139.4	38	138.6	17	136.2	108	139.3
17 Ba-Br 高	136	138	36	136.3	29	138.1	33	139.2	17	139.4	108	139.3
8/1 頭長幅示数	68.0	73.3	43	77.3	32	75.6	37	76.0	16	74.9	108	76.6
17/1 頭長高示数	70.0	73.8	30	74.2	29	74.9	33	76.2	16	76.8	108	76.9
17/8 頭幅高示数	103.0	100.7	33	96.8	29	102.7	33	100.8	17	102.5	108	100.1
45 鼻骨弓幅	(132)	142	39	140.2	31	137.8	25	136.4	18	135.2	106	134.5
46 中 頭 帽	101	(104)	48	104.8	28	101.8	24	101.8	19	100.3	107	99.9
47 頭 高	112	122	31	123.7	22	122.5	14	126.9	11	117.3	66	122.2
48 上 頭 高	68	75	49	73.3	27	72.4	18	74.5	16	69.8	92	71.8
47/45 顎示数(K)	84.8	85.9	23	87.6	19	89.4	13	93.2	11	86.4	64	91.4
47/46 顎示数(V)	110.9	117.3	28	117.4	20	120.4	13	123.9	11	116.5	65	122.2
48/45 上顎示数(K)	51.5	52.8	34	52.4	23	53.0	17	54.4	16	51.7	90	53.5
48/46 上顎示数(V)	67.3	72.1	43	70.2	23	71.6	17	73.1	16	69.8	91	71.8
51 眼窩幅(左)	42	43	42	43.4	29	42.4	24	42.6	18	42.0	108	43.0
52 眼窩高(左)	31	37	49	33.9	29	33.7	24	34.1	18	34.4	108	34.4
52/51 眼窩示数(左)	73.8	76.0	41	78.2	29	79.4	23	80.9	18	82.1	108	80.2
54 鼻 幅	27	28	55	26.7	30	26.8	24	26.5	17	26.0	108	25.9
55 鼻 高	47	54	51	52.0	33	50.9	24	52.9	16	51.4	108	52.2
54/55 鼻 示 数	57.4	51.9	51	51.6	30	52.9	24	50.1	16	50.5	108	49.8
72 全側面角	73	85	37	84.5	18	84.2	16	83.2	15	82.5	92	83.8
74 齒槽側面角	55	68	34	70.5	17	71.3	16	67.0	14	65.2	107	70.7

1) 中崎・永井(1989)、2) 丰田・永井(1989)、3) 中崎(1993)、4) 中崎(1987)、5) 中崎(1985)、6) 原田(1964)

の矢状径・横径・周径はそれぞれ29.7・28.0・90.8mm)に較べるとやや細く、後世の人骨群に近い。柱状性は弱い。

一方の脛骨は比較的太く、その栄養孔位周は102mmで、例えば吉母浜中世人(90.8mm)や現代人(88.9mm)に較べると明らかな差が認められる。骨幹の扁平性は見られない。

なお、推定身長は不明である。

総括・考察

1994年度の博多区御供所町における発掘調査によって、8~9世紀初頭の男性熟年入骨一体が出土した。北頭位、左側臥の姿勢で埋葬されたもので、頭部については以下の特徴が明らかとなった。

- 脳頭蓋では著しい長頭傾向を見せ、頭長の大きさ、頭幅の狭さが著しい。
- 顔面部では、低顎性が強く、眼窩や鼻型にも同傾向が明らかである。
- 鼻根部は著しく扁平で、鼻根部の陥凹、鼻梁の隆起はともに微弱である。
- 齒槽性突顎が頗著で、咬合形式は唇状咬合である。
- 大腿骨の柱状性は弱く、骨幹は比較的細いが、下腿骨の骨幹は太く、頑丈である。

博多からはこれまでも少數ながら古代~中世の人骨が出土しているが(中橋、1987、1989、1990、1995、a, b)、その特徴が明らかにされたのはまだ僅かに数体に過ぎず、個体変異もやや大きい。ただ、他の地域の中世人などと較べて目に付いた点として、長頭性や齒槽性突顎といった中世人的特徴

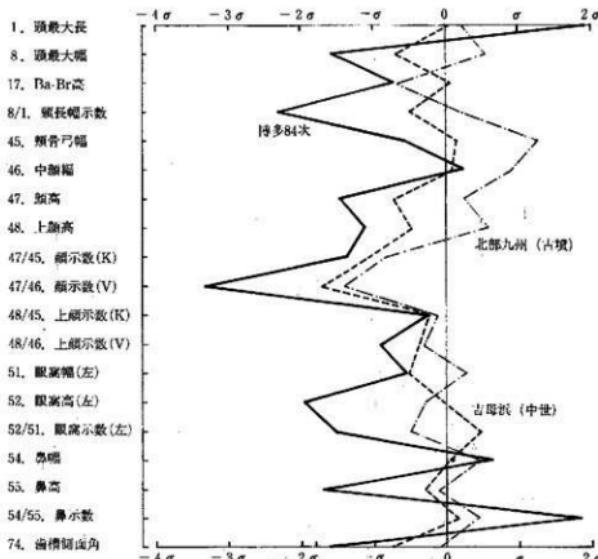
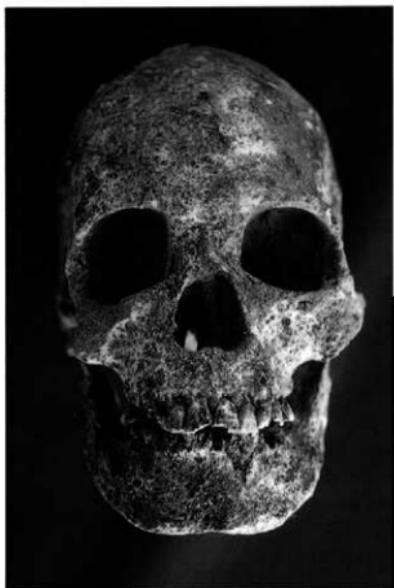


図1 西南日本現代人を基準とした偏差折線(男性)



と同時に、その顎高が比較的高く、顔面サイズの大きな傾向も窺われることを指摘してきた。

今回出土した男性人骨は、従来のものよりさらに遡って8~9世紀に所属しており、ある程度特徴の窺える同時代の博多の人骨としては初めての出土例となるものである。その意味でも、どの様な特徴を示すのか、興味が持たれたが、得られた結果は、これまで主に中世期の人骨の特徴として指摘されてきた、長頭、低顎、低眼窓、広鼻、扁平な鼻根部、それに強度の歯槽性突頸という、種々の特徴を一通り挙えた一例であることが明らかとなつた。

この資料に時代的に比較的近い博多出土の人骨資料として、第40次調査出土の女性人骨（11世紀所属）があるが（中橋、1990）、それはやはり低顎性が強く、歯槽性突頸が強いものの、脳頭蓋では逆に短頭傾向も見せるといった一例であった。また、少し時代の下った13世紀所属の2例では、長頭、歯槽性突頸の他に、明らかな高顎傾向が見て取れる（中橋、1989）。以上のように各部分の特徴が時代的にも、また個体間でもかなり錯綜した状況となっている。

上記のように、当人骨で見られた長頭、低顎、歯槽性突頸といった特徴は、一般的に中世人の時代特性とされてきたが、しかし、全国的にも古墳時代と中世期を繋ぐ古代の人骨が欠落しており、こういった形質がいつごろ、どの様な経緯で出現するのか、まだ明らかにされてはいない。その意味で、今回の8~9世紀の、しかも博多の人は早くもそうした形質を描えていることは非常に興味深い。いずれにしてもまだまだ資料数が不足しており、現段階で各個体の特徴に拘泥することは避けるべきであろうが、今後の当地における人類学的な研究課題として注目していく必要があろう。高顎性という、当地の弥生・古墳時代人骨の顎著な特徴の時代推移に関する問題と共に、こうした「中世人の特徴」の出現経緯や、博多という古代からの商都の住人の地域特性を明らかにすることは、人骨形質の時代的変化や地域差の要因を探る上で貴重な知見をもたらすものと期待される。

文 献

- 阿部美世(1955)：『現代九州人大腿骨の人類学的研究』、人類学研究2。
- 原田忠昭(1954)：『現代西南日本人頭骨の人類学的研究』、人類学研究1。
- Howelles, W.W.(1973) : Cranial variation in man. Pap. Peabody Mus. Archaeol. Ethnol., vol.67. Harvard Univ.
- 鶴謹命達(1955)：『九州人下腿骨の研究』、人類学研究2。
- Martin-Saller(1957) : Lehrbuch der Anthropologie. Bd.I.Gustav Fischer Verlag. Stuttgart.
- 森本岩太郎(1971) : 「脛骨横断指數の算出をめぐらして—Martin法への反省」、人類学雑誌79。
- 中橋孝博(1987) : 「福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨」、人類学雑誌95。
- 中橋孝博(1989) : 「博多遺跡群第26次調査・漁港線関係第3次出土の中世人骨について」、福岡市埋蔵文化財調査報告書204。
- 中橋孝博(1990) : 「博多遺跡群第40次調査出土の中世人骨について」、福岡市埋蔵文化財調査報告書260。
- 中橋孝博(1993) : 「席田背骨遺跡出土の弥生・近世人骨」、福岡市埋蔵文化財調査報告書356。
- 中橋孝博(1995, a) : 「博多遺跡群第78次調査出土の中世人骨」、福岡市埋蔵文化財調査報告書393。
- 中橋孝博(1995, b) : 「博多遺跡群第62次調査出土の古代・中世人骨」、福岡市埋蔵文化財調査報告書397。
- 中橋孝博・永井昌文(1985) : 「山口県吉母浜遺跡出土人骨」、古母浜遺跡、下関市教育委員会。
- 中橋孝博・永井昌文(1987) : 「博多遺跡群第28次調査出土中世人骨」、博多7、福岡市埋蔵文化財調査報告書147。
- 中橋孝博・永井昌文(1989) : 「弥生人の形質」、弥生文化の研究1、雄山閣出版。
- 鈴木尚(1963) : 「日本人の骨」、岩波新書477。

博多56

—博多遺跡群第84次調査の概要

福岡市埋蔵文化財調査報告書第521集

1997年(平成9年)3月31日発行

編集・発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷

寿印刷 株式会社

福岡市西区小戸4丁目5番42号

